

す わ は た
諏訪畑遺跡 第3次調査

— 介護老人保健施設「秋葉の郷」建設に伴う発掘調査報告書 —



2008

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市秋葉区大間字諏訪畑242番地1ほか所在の諏訪畑遺跡発掘調査報告書である。調査は3次にわたり実施し、1次調査を平成18年1月25日、2次調査を平成18年5月19日～23日、3次調査を平成18年2月13日～3月23日にかけて行った。
- 2 調査は介護老人保健施設「秋葉の郷」建設に伴い、医療法人社団幸人会から新潟市が受託し、新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市埋蔵文化財センター（以下、市埋蔵文化財センターという）が補助執行した。
- 3 発掘調査は、平成18年度に実施し、平成19年度に整理作業および報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章に記した。
- 4 出土遺物および発掘調査・整理作業に係る記録類は、一括して市埋蔵文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の執筆・編集は瀬田憲幸（市埋蔵文化財センター学芸員）が行った。
- 6 本書で用いた写真は、遺跡写真については前山精明（市埋蔵文化財センター副主幹）が撮影し、遺物写真は佐藤俊英氏（ビッグヘッド）に依頼した。
- 7 各種図版作成および編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタル図画およびデータ編集並びに印刷・製本を行った。
- 8 出土資料の自然科学分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社へ委託したが、編集は瀬田による。
- 9 調査から本書の作成に至るまで下記の方々、諸機関よりご指導・ご協力を賜った。

医療法人社団幸人会 春日真実 三ツ井朋子（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図画・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。縦北は真北から西偏約7度である。掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者および製作年を示した。
- 3 本文中の注は各章末尾に記した。引用・参考文献は編著者と発行年を西暦で〔 〕内に示し、巻末に一括して掲載した。
- 4 遺構・遺物は通し番号とし、本文および観察表・図版の番号は共通する。
- 5 土壌・遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局発行の『新版標準土色帖』に拠り、その記号を本書に掲載した。
- 6 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、須恵器以外を白抜きとした。
- 7 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差を考慮し中軸線の両側に空白を設けた。
- 8 遺物の注記は「スワハタ」とし、調査年度・出土地点を併記した。
- 9 遺構・遺物観察表の（ ）付きの数値は、推定値を意味する。
- 10 複数の遺構・グリッド間で接合した遺物については、図面図版において、その主な部分が出土した遺構・グリッドを強調してある。

目 次

第I章 序 章

| | |
|-------------|---|
| 第1節 遺跡概観 | 1 |
| 第2節 調査に至る経緯 | 1 |

第II章 遺跡の位置と環境

| | |
|-----------------|---|
| 第1節 遺跡の位置と地理的環境 | 2 |
| 第2節 周辺の遺跡 | 5 |

第III章 調査の概要

| | |
|-------------|----|
| 第1節 試掘・確認調査 | 7 |
| A 試掘調査 | 7 |
| B 確認調査 | 7 |
| 第2節 本発掘調査 | 7 |
| A 調査方法 | 7 |
| B 調査経過 | 9 |
| C 調査体制 | 9 |
| 第3節 整理作業 | 10 |
| A 整理方法 | 10 |
| B 整理経過 | 10 |
| C 整理体制 | 10 |

第IV章 遺 跡

| | |
|---------|----|
| 第1節 概 要 | 11 |
| 第2節 層 序 | 11 |
| 第3節 遺 構 | 11 |

第V章 遺 物

| | |
|--------------|----|
| 第1節 遺物の概要 | 14 |
| 第2節 用語の説明 | 14 |
| 第3節 出土遺物 | 15 |
| A 遺構出土土器 | 15 |
| B 包含層出土土器 | 15 |
| C 土製品・鉄滓・搬入礫 | 16 |

第VI章 自然科学分析

| | |
|-------------------|----|
| 第1節 諏訪畑遺跡における樹種同定 | 17 |
| A はじめに | 17 |
| B 試 料 | 17 |
| C 分析方法 | 17 |
| D 結 果 | 17 |
| E 考 察 | 18 |

第七章 総括

| | |
|---------------|----|
| 第1節 土器 | 20 |
| A 器種構成比率 | 20 |
| B 器高指数と底径指数 | 20 |
| C 編年の位置付け | 20 |
| D 平底の土師器鍋 | 22 |
| 第2節 遺構 | 23 |
| A 遺構の変遷 | 23 |
| B SX4・SX7について | 24 |
| 第3節 まとめ | 27 |
| 引用・参考文献 | 28 |
| 報告書抄録・奥付 | 巻末 |

挿図目次

| | |
|--------------------------|----|
| 第1図 周辺地形分類図 | 3 |
| 第2図 周辺の古代遺跡分布 | 4 |
| 第3図 試掘坑土層柱状図 | 7 |
| 第4図 試掘坑位置図および試掘・確認調査出土遺物 | 8 |
| 第5図 木材サンプル断面写真 | 19 |
| 第6図 主要遺構別器種組成および食膳具法量分布 | 21 |
| 第7図 諏訪畑遺跡周辺の平底鍋 | 23 |
| 第8図 平底鍋器高指数 | 23 |
| 第9図 諏訪畑遺跡の変遷 | 24 |
| 第10図 が跡状遺構検出例 | 26 |

表目次

| | |
|-----------------|----|
| 第1表 樹種同定結果 | 18 |
| 第2表 諏訪畑遺跡周辺の平底鍋 | 23 |
| 第3表 が跡状遺構検出例一覧 | 25 |

別表目次

| | |
|------------------|----|
| 別表1 遺構計測表 | 31 |
| 別表2 出土遺物観察表 土器 | 31 |
| 別表3 出土遺物観察表 土錘 | 32 |
| 別表4 出土遺物観察表 鉄滓 | 32 |
| 別表5 出土遺物観察表 搬入礫 | 32 |
| 別表6 遺構出土土器 器種構成表 | 32 |

図版目次

- 図版 1 周辺旧地形図 (1/25,000)
図版 2 周辺地形図 (1/10,000)
図版 3 遺跡周辺主要地形分類図 (1/5,000)
図版 4 グリッド設定図 (1/2,500)
図版 5 遺構全体図 (1/200)
図版 6 遺構詳細平面図 (1/40)
図版 7 4B・5Bグリッド周辺遺物出土状況 (1/50)
図版 8 基本層序 (1/40)
図版 9 遺構個別図 (1/40)
図版 10 小グリッド別古代土器重量分布図 (1/200)
図版 11 遺物及び炭化物分布状況 (1/200)
図版 12 出土遺物1 (遺構・包含層出土土器)
図版 13 出土遺物2 (遺構・包含層出土土器)
図版 14 出土遺物3 (包含層出土土器・その他遺物)

写真図版目次

- 写真図版 1 空中写真 (1948年)
写真図版 2 空中写真1 (東から新津丘陵を望む)
空中写真2 (西から五頭山方向を望む)
写真図版 3 調査着手前 (南から)
基本層序1 (5C15)
基本層序2 (5B15)
写真図版 4 完掘状況1Cグリッド周辺 (北東から)
完掘状況5Bグリッド周辺 (南西から)
写真図版 5 遺構配置状況 (南から)
完掘状況 (南から)
写真図版 6 SK2完掘 (北西から)、SX4断面 (西から)、SX4断面 (南から)、SK5断面 (北から)、SK3・SX4・SK5完掘 (北から)、SX7検出状況 (北西から)、SX7断面 (北から)
写真図版 7 SK8完掘 (東から)、SD9断面 [j-j'] (東から)、SD9完掘 (東から)、SK10鍋12出土状況 (南から)、SK10断面 (東から)、SK10完掘 (南から)
写真図版 8 SK11完掘 (東から)、SK12完掘 (東から)、SK13完掘 (東から)、P14断面 (東から)、SK20完掘 (東から)、P14平底鍋13出土状況 (東から)、4B20・25グリッド長甕33出土状況 (南から)
写真図版 9 集合写真1 (土器)、集合写真2 (土鏃・鉄滓・搬入礫)
写真図版 10 出土遺物1 遺構 (1～4・6～13)、包含層 (14・15・20・28・33・40・42)
写真図版 11 出土遺物2 SK10 (5)、包含層 (16～19・21～27・29～32・34～39・41・43)、土製品・鉄滓・搬入礫
写真図版 12 調整痕拡大写真

第I章 序 章

第1節 遺 跡 概 観

諏訪畑遺跡は新潟市秋葉区大関字諏訪畑242番地1ほかに所在する推定面積6,000m²を測る平安時代の遺跡である。旧能代川右岸の自然堤防上に立地し、付近の標高は海拔9.5～10m程度である。平成17年度に実施された介護老人保健施設建設に先立つ試掘調査で発見された。工場および資材置き場として長期間利用されており、表層の攪乱が激しいが、遺構確認面まで地表面から1.5～2mと深く、遺跡への影響は比較的少ない。

地理的には新津丘陵の東側の出口にあたり、付近の能代川・早出川を通じて上流の五泉・村松、下流は旧新津市内から小阿賀野川を介して信濃川・阿賀野川双方に接続可能な交通の要地である。

第2節 調査に至る経緯

平成16年度、新潟市教育委員会（以下新津市教委という）に医療法人社団幸人会（以下事業者という）の代理人より事業実施予定地における遺跡の有無について照会があった。新津市教委では、周知の埋蔵文化財の包蔵地ではないが、付近の遺跡分布および地形から未周知の遺跡が存在する可能性があるかと判断、工事中の不時発見による影響を考慮し、遺跡の有無の確認を目的とした試掘調査の事前実施の必要性について説明した。

新津市は平成17年3月21日に新潟市と合併したが、本件については新潟市教育委員会（以下市教委という）が引き継ぐことになった。平成17年5月24日、事業者代理人と再度協議がなされ、市教委では改めて事前の試掘調査について協力を求め、依頼あり次第調査に着手することを伝え、事業者側も了承、平成17年12月20日付けで試掘調査依頼が提出された。

試掘調査（1次調査）は市教委によって平成18年1月25日に実施された。調査の結果複数の試掘坑から遺構・遺物が発見され、平安時代の遺跡が存在することが判明した。市教委では文化財保護法第97条にもとづき平成18年2月3日付け新歴第1145号の6で新潟県教育委員会（以下、県教委という）に新遺跡の発見について通知すると共に、遺跡の取扱いについて事業者と協議を行った。協議の過程で現状保存が不可能な部分があることがわかり、その部分については本発掘調査による記録保存を前提として協議することとなった。この間、再度確認調査（2次調査）を実施し、その結果をもとに発掘調査費用・面積を再検討した結果、最終的な調査範囲は、建物基礎部分約900m²となった。

その後、平成18年9月15日付けで事業者との間に受託契約を締結し、測量業務の入札・契約を経て、平成19年2月5日付け（17）新歴第1145号の22により県教育長宛てに文化財保護法第99条にもとづく発掘通知を行い、発掘調査（3次調査）を実施することとなった。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境 (第1図 図版1～3 写真図版1)

わが国有数の大河である信濃川・阿賀野川が運搬する土砂により形成された越後平野は、長さ約100km、幅約25km、面積約2,040km²を測る。平野の主要部は新潟市が占め、東を阿賀野市、西を長岡市、北を北蒲原郡聖籠町、南東を五泉市、南を三条市とそれぞれ境を接する。市域の地形は大きく海岸部の砂丘、西の弥彦・角田山塊、南東の新津丘陵と、その間の沖積面とに分けられる。

海岸線後退にともなう風沙作用により形成された砂丘は、海岸線と平行に弧状に連なって分布している。いずれも完新世第四期以降の形成とされ、更新世由来の「古砂丘」と対比して、「新砂丘」と呼ばれている〔新潟古砂丘グループ1979〕。

弥彦・角田山塊は海底噴出した溶岩が更新世前期（170万年前～70万年前）に隆起して形成され、山麓に更新世起源の段丘を有する。段丘の裾部には小規模な扇状地や侵食により形成された谷底平野が見られる。

市の南東部にある新津丘陵は、第3期中新世（2500万～500万年前）の火山活動を起源とする堆積物が更新世前期に隆起して形成された地形である。沖積面に半島状に突き出した格好となっており、弥彦・角田山塊同様、縁辺に更新世段丘を伴い、丘陵麓部では侵食作用で形成された谷底平野が小規模な樹状河谷と扇状地を形成している。これらの山塊・丘陵部は平地と丘陵（里山）が近接し、それぞれが密接な関係のもとにあり、自然的・文化的に多様な相を見せている。

市域の大部分を占める沖積面は、完新世以後、海岸部を砂丘に仕切られた内海状の環境で、河川による沖積作用により形成されたものである。平野中には、河川の名残りである旧河道や自然堤防のほか、潟湖状の沼地が至る所に分布していたが、戦中～昭和30年代の耕地整理と乾田化により、多くは姿を消した。

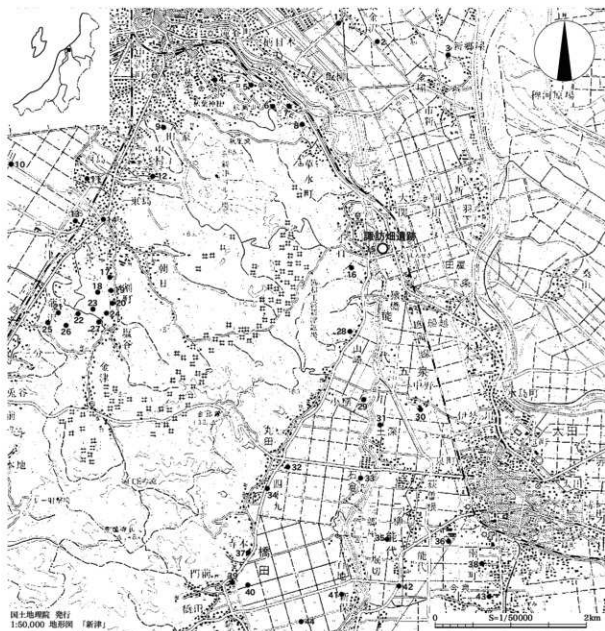
諏訪畑遺跡のある新津丘陵東側は、河内の山々を源とする早出川や能代川によって形成された沖積地である。遺跡の西隣を新津丘陵に沿って流下する能代川は、五泉市戸倉の宝蔵山（標高897.1m）を源流とし、同市能代にて近隣の河川を合わせ、新潟市秋葉区小口から新津市街を貫流し、新潟市秋葉区荻島で小阿賀野川と合流する延長33.4kmの河川である。流域面積は141.4km²で、五泉市・新潟市内で水系を完結させる。能代川は古くから灌漑用水として、また交通路としても重要であった反面、蛇行曲流が激しく、洪水の頻発する危険な川でもあった。戦後の度重なる河川改修により流路は直線化されていったが、現在でも周辺には流路跡が明瞭に残っている（図版3）。米軍写真によると、1947年には遺跡の南西に畑が存在しているが、直後の河川改修により1949年には畑が姿を消し、河道となっている。

その後は大きな地形改変を受けず、果樹園や畑として利用されていたが、昭和40年代に工場用地となり、基礎工事や表層の土壌改良が行われている。

諏訪畑遺跡は新津丘陵東麓から約150m東の能代川右岸の自然堤防上に立地している。現地標高は約10mである。基盤層は砂質土壌で、水はけは良い。現地形は平坦であるが、遺構確認面は西から東に向かって傾斜しており、東側は後背低地状の様相を呈している。



第1図 周辺地形分類図



| No. | 名称 | 市町村 | 時代 | 種別 | No. | 名称 | 市町村 | 時代 | 種別 |
|-----|----------|-----|-----------|-------|-----|-------|-----|----------|-------|
| 1 | 西江浦 | 新潟市 | 平安 | 遺物包含地 | 24 | 金津和越A | 新潟市 | 奈良・平安 | 製鉄跡 |
| 2 | 網漁寺道上 | 新潟市 | 古代・中世 | 遺物包含地 | 25 | 居村A | 新潟市 | 平安 | 製鉄跡 |
| 4 | 秋葉ブドウ園 | 新潟市 | 縄文・古代 | 遺物包含地 | 26 | 居村B | 新潟市 | 平安 | 製鉄跡 |
| 5 | 七本松遺跡群 | 新潟市 | 平安 | 窯跡 | 16 | 小実山 | 五泉市 | 縄文・弥生・古代 | 遺物包含地 |
| 6 | 滝石窯跡 | 新潟市 | 平安 | 窯跡 | 28 | 山崎窯跡 | 五泉市 | 奈良 | 窯跡 |
| 7 | 草水町1丁目窯跡 | 新潟市 | 旧石器・縄文・平安 | 窯跡 | 29 | 夏下 | 五泉市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 8 | 草水町2丁目窯跡 | 新潟市 | 平安 | 窯跡 | 30 | 中野 | 五泉市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 9 | 城見山 | 新潟市 | 縄文・古代・中世 | 遺物包含地 | 31 | 村付 | 五泉市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 10 | 古通 | 新潟市 | 平安 | 遺物包含地 | 32 | 丸田 | 新潟市 | 平安 | 遺物包含地 |
| 11 | 坂大門 | 新潟市 | 平安 | 遺物包含地 | 33 | 坂表 | 五泉市 | 奈良・平安・中世 | 遺物包含地 |
| 12 | 大坪 | 新潟市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 | 34 | 道金 | 新潟市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 13 | 舟戸 | 新潟市 | 古墳・古代・中世 | 集落跡 | 35 | 江中 | 五泉市 | 古代 | 遺物包含地 |
| 14 | 塩平 | 新潟市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 | 36 | 福島 | 新潟市 | 奈良・平安・中世 | 遺物包含地 |
| 15 | 淵沼型 | 新潟市 | 平安 | 遺物包含地 | 37 | 橋田B | 五泉市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 17 | 古津和越B | 新潟市 | 奈良・平安 | 製鉄跡 | 38 | ツブタ | 新潟市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 18 | 古津八幡山 | 新潟市 | 弥生・古墳・平安 | 遺物包含地 | 39 | 橋田C | 五泉市 | 古代 | 遺物包含地 |
| 19 | 古津和越A | 新潟市 | 奈良・平安 | 製鉄跡 | 40 | 橋田A | 五泉市 | 奈良 | 遺物包含地 |
| 20 | 金津和越B | 新潟市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 | 41 | 新保 | 五泉市 | 奈良・平安・江戸 | 遺物包含地 |
| 21 | 神田 | 新潟市 | 縄文・奈良・平安 | 遺物包含地 | 42 | 段ノ腰 | 五泉市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 22 | 居村C | 新潟市 | 縄文・弥生・平安 | 製鉄跡 | 43 | 石ノ子 | 五泉市 | 奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 23 | 大入 | 新潟市 | 平安 | 製鉄跡 | 44 | 佐古田 | 五泉市 | 奈良 | 遺物包含地 |

第2図 周辺の古代遺跡分布

第2節 周辺の遺跡（第2図）

概 要

新津丘陵とその周辺には約110ヶ所の遺跡が存在するが、旧石器・縄文・弥生時代の遺跡の多くは丘陵とその縁辺の段丘上に多く分布する。古墳時代には丘陵部に古墳の造営がなされ、奈良・平安時代になると、水田耕作を背景とした平野部の開発が進み、自然堤防を中心に遺跡が増加するが、製鉄遺跡や須恵器・土師器窯などの生産遺跡は、燃料材の入手が容易な丘陵の麓に営まれる。遺跡数は9世紀末をピークに減少するが、これ以後中・近世から現代にいたるまで平野部が主たる生活の場となる。

旧石器時代

旧石器時代の遺物は丘陵部に分布し、古津八幡山遺跡・草水町2丁目遺跡でナイフ形石器・石刃等の資料が出土している。いずれも散発的な出土にとどまり、本格的に発掘調査された遺跡はない。

縄文時代

丘陵部に多く立地するが、晩期になると沖積地にも進出する。丘陵部では愛宕澤遺跡（草創期）・平遺跡（中・後期）・秋葉遺跡（中・後期）・原遺跡（中・晩期）などが主なものである。沖積地では大沢谷内遺跡（晩期）で相当数の遺物が出土している。能代川沿いでは後期前葉の新田遺跡・巳ノ明遺跡などが自然堤防上に分布する。

弥生時代

丘陵部では古津八幡山遺跡・大倉山遺跡・埋葬地遺跡・居村C遺跡が主なもので、いずれも弥生時代後期に属する。古津八幡山遺跡は環濠・竪穴建物・前方後方形墳墓などを有する拠点集落で、東北系・北陸系両系統の土器が出土するなど、この時代の地域間交流を考える上で注目される。平野部では丘陵の西に位置する舟戸遺跡で遺物の出土が報告されているが、まとまった量ではない。能代川沿いでは諏訪田遺跡・寛下遺跡で若干の出土がある。

古墳時代

県下最大級の造出付円墳である古津八幡山古墳（前期）のほか、集落では高矢C遺跡・舟戸遺跡（いずれも中期）が丘陵の麓に、丘陵北の沖積地に沖ノ羽遺跡・上浦B遺跡・結遺跡などが分布する。能代川流域では住吉田遺跡・寛下遺跡が能代川河川改修に伴い調査されている。断片的であるが、人々の平野部への進出がうかがえる。

平安時代

9世紀成立の『和名類聚抄』には越後国蒲原郡に日置・勇礼・桜井・青海・小伏の郷名が記載されている。新津・五泉地域には日置郷が所在したとされる〔五泉市史編纂委員会2004〕が、決定的な証拠は見つかっていない。惣田永年私財法制定にともない、国衙や寺院・土豪などが農地開発に乗り出し、平野部の開発が進む。能代川流域では西大寺の私領である鶴橋荘（現五泉市橋田付近）が8世紀後半ごろ成立している。

新津丘陵周辺でも平野部に遺跡の増加が見られる。平地では微高地に住居を構え、周辺で水田耕作を行っていたと思われる、上浦A・B遺跡や沖ノ羽遺跡のような集落と思われる遺跡も確認されている。能代川流域でも新保遺跡・住吉田遺跡・中田遺跡などが、小河川のほとりに営まれていたことが判明している。

丘陵部では製鉄関連遺跡として居村A～C遺跡、大入遺跡などから鉄の製錬炉および多数の木炭を検出している。また山崎窯跡・草水町2丁目窯跡・七本松窯跡など在地須恵器窯が新津丘陵北東麓一帯に分布している。

中世

平安末期にそれまでの国・郡を単位とする支配体制が崩れ、荘園や国衙領による支配体制が成立する。新津丘陵周辺には菅名荘・青海荘・金津保・長井保が存在したが、遺跡周辺は菅名荘に属していたと思われる〔五泉市史編纂委員会前掲〕。諏訪畑遺跡のある大関・小口は、承久年間（1219～1221）の開村と伝えられる〔中蒲原郡役所1986b〕。

遺跡には集落と城館・山城跡がある。城館には新津城・大関館のように自然堤防に立地するもの、程島館など丘陵末端部に立地するものがある。集落は古代から引き続き平野部の自然堤防に立地し、古代の遺跡と複相をなす場合が多い。新津丘陵北側の自然堤防に立地する江内遺跡（14～15世紀）・内野遺跡（13～15世紀）・沖ノ羽遺跡などが中世集落と推定されている。また細池寺道上遺跡では、数次にわたる調査で多数の溝や井戸などのほか、中世以降の圃場と思われる遺構が検出されており、後背低地の生産域としての利用が指摘されている〔小池義人ほか1994〕。新津丘陵西側・能代川周辺の様相は不明だが、遺跡の分布は北側と同様に丘陵の麓と自然堤防を中心とする。

近世

中世末から近世初期にかけて低湿地の開拓が本格化し、現集落の多くが文献や伝承にあらわれてくるが、正保年間（1644～1647）成立のいわゆる正保絵図には小口村・大関村など現代に続く集落が記載されている。遺跡のある大関村は、16世紀末に上杉氏が会津に転封されると、替わって移封された溝口氏の所領となる。江戸幕府成立後は、次々と領主が入れ替わり、最後は会津藩領として明治維新をむかえている。

新潟市内では能代川下流の江内遺跡で17世紀前半の集落が検出されているが、遺跡の多くは現集落と重複しているため、その実態は不明である。

第三章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査

A 試掘調査(第3・4図)

諏訪畑遺跡発見の契機となった試掘調査(第1次調査)は、介護老人保健施設建設に先立ち事業者の依頼を受け、平成18(2006)年1月25日に実施した。対象面積は計画面積全体の7,272m²である。コンクリート舗装が残っていたため、地表が露出している場所に9箇所の試掘坑を設定し(1~9T)、重機により2mを目安に掘削して遺構・遺物の有無を調べた。

調査の結果1Tで平安時代の土師器3点、2・6Tでピット数基が確認されたため、未周知の遺跡と判断し、県教育長宛てに発見通知を提出すると共に、事業者と取扱いについて協議を開始し、基礎工事部分約1,800m²を対象に本格調査を実施する方向で調整に入った。

B 確認調査(第3・4図)

試掘調査の結果をもとに事業者と協議を進める中で、調査費用を削減する必要性が生じた。そこで追加の確認調査を行い、その結果に基づき再度積算を行うこととなった。調査は平成18年5月19日から23日にかけて実施し、遺構の遺存状況と範囲・深さを確実に把握するため、コンクリート舗装を除去した上、10箇所の試掘坑を追加設定し(10~19T)、重機により掘削した。

調査の結果11・13・15Tで遺構・遺物を確認し、2・6・11Tを中心として1.5~2m付近に遺構・遺物分布の中心があり、それ以外は遺物量がきわめて希薄であることが判明した。この結果を受けて積算した調査費用をもとに事業者と協議を続け、最終的に約900m²について本発掘調査を実施することとなった。なお、13・15Tについては工事の影響を受けないため本調査範囲から除外した。

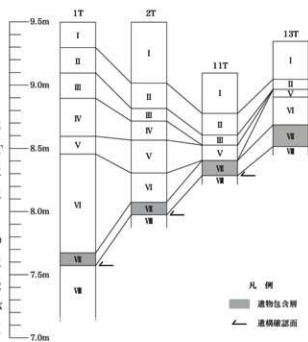
第2節 本発掘調査

A 調査方法

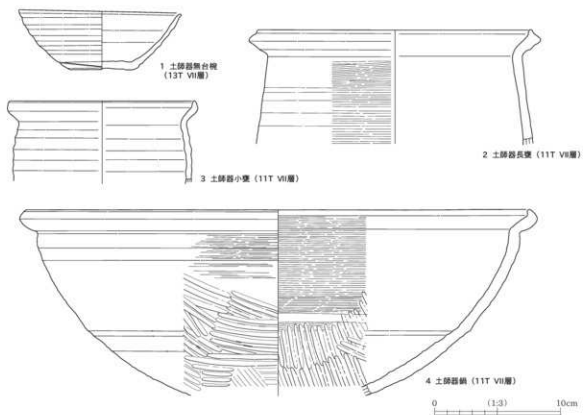
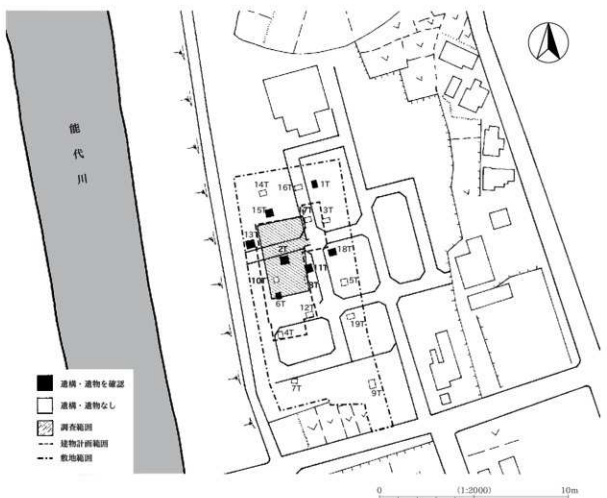
1) 現況(写真図版3)

現地標高は海拔9.5~10m程度であり、隣接する能代川との比高差は6m近い。南北方向の傾斜は2T付近を最低とし浅いV字形をなす。東西方向も同様に河川側が最も高く、やはり2T東側を最低とし、東に向かって徐々に高まっていく。

土地は長らく畑地であったようで、1947年撮影の米軍写真でもその様子が確認できる。昭和40年代に工場となるが、この期間に盛土・土壌改良など大きな変更を受けたようである。水はけは良好だが、標高が下がるにつれ排水量が多くなり、河川との比高差にも関わらず地表下1.5m前後から徐々に湧水する。



第3図 試掘坑土層柱状図(S-1/30)



第4図 試掘坑位置図および試掘・確認調査出土遺物

2) グリッドの設定 (図版4)

基準杭の打設は測量業者に委託した。世界測地系にもとづきX座標196,540・Y座標58.50地点に設置した1A杭(北緯37度46分09秒096818, 東経139度09分32秒1172)を基点に10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は北西隅の杭を基点として短軸(南北)をアラビア数字、長軸(東西)をアルファベットとし、この組合せにより表示した。大グリッドはさらに2m方眼の小グリッドに25分割され、大・小あわせて呼称される(例: 4B7)。

3) 調査方法

①表土除去 確認調査により、遺物包含層が薄く、遺物量も少ないと判断されたことから、重機を用いて遺構確認面まで一気に除去した。確認面までの深度があるため、安全を考慮して外壁に20～30%の勾配をつけた。また、表土除去と平行して調査区内縁に土側溝を設け、雨水・湧水の強制排水を行っている。

②遺構確認・掘削 遺構・遺物の検出は、人力によった。検出された遺構はプラン確認後、番号を付し、部分的に掘削して土層断面を記録後、完掘し、完掘状態の記録をとっている。排土は調査区内に仮置きし、ある程度溜まった時点で重機により調査区外へ排出した。

③実測 断面図を1/20(一部1/10)で作成した。平面図・地形測量等は測量業者に委託してトータルステーションにより作成したが、一部は平板を用いて図化している。

④写真撮影 調査写真は主に35mmおよび6×7版のフィルムカメラで撮影し、適宜デジタルカメラを併用している。

⑤遺物取上げ 出土位置をトータルステーションで記録後、番号を付し個別に取上げたが、一括性の高いものについてはまとめて番号を付している。

⑥自然科学分析 出土した木炭類について、樹種同定を実施した。

B 調査経過

平成18年2月13日に機材を搬入し、2月14日より表土除去を開始した。あわせて壁の法面を仕上げ、土側溝を掘削している。遺構確認は表土除去終了後の2月28日から着手し、調査区内のグリッド杭打設および出土遺物のトータルステーションによる取上げを平行して行った。検出された遺構は3月8日から順次掘削し、必要な記録を作成した。

3月22日に全体の完掘写真を撮影して片付けを開始、26日に完全撤収した。最終的な発掘調査面積は、896m²である。

C 調査体制

| 平成17年度 第1次調査(試掘調査) | | 平成18年度 第3次調査(本発掘調査) | |
|--------------------|-----------------------|---------------------|--|
| 調査主体 | 新潟市教育委員会(教育長 佐藤満夫) | 調査主体 | 新潟市教育委員会(教育長 佐藤満夫) |
| 所管課 | 新潟市歴史文化課(課長 渡辺ユキ子) | 所管課 | 新潟市歴史文化課(課長 渡辺ユキ子) |
| 調査担当 | 新潟市歴史文化課 副主査 福田仁史 | 調査担当 | 新潟市埋蔵文化財センター 学芸員 潮田憲幸 |
| 調査員 | 新潟市埋蔵文化財センター 学芸員 潮田憲幸 | 調査員 | 新潟市埋蔵文化財センター 副主幹 前山精明 同 主査 諫山えりか 同 専門臨時職員 高野裕子 |
| 事務局 | 新潟市埋蔵文化財センター(所長 山田光行) | 事務局 | 新潟市埋蔵文化財センター(所長 山田光行) |
| 平成18年度 第2次調査(確認調査) | | 整理補助 | 桑野多真美 沼澤綾子 |
| 調査主体 | 新潟市教育委員会(教育長 佐藤満夫) | | |
| 所管課 | 新潟市歴史文化課(課長 渡辺ユキ子) | | |
| 調査担当 | 新潟市埋蔵文化財センター 学芸員 潮田憲幸 | | |
| 事務局 | 新潟市埋蔵文化財センター(所長 山田光行) | | |

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）換算で10箱である。内訳は古代の土器が9箱、鉄滓・土製品・搬入礫1箱となる。

整理作業は①遺物の洗浄、②注記、③グリッド・器種別の重量計測、④遺構出土遺物の器種毎の重量・個体数計測、⑤接合、⑥報告書掲載遺物の抽出、⑦実測図・観察表の作成、⑧トレース、⑨版下作成の段階を経ている。遺物実測図は整理補助員が作成し、トレースおよび版下作成は、業者に委託しデジタルトレースした。

2) 遺構

平面図作成にあたっては、測量業者に委託した遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。遺構図版は測量業者が作成したものをデジタル編集した。

B 整理経過

発掘作業終了後の平成19年4月に出土遺物の水洗・注記および図面・写真整理を行い、計測・接合作業および測量業者に委託した図面類の校正作業は、5月から7月にかけて実施した。接合終了後実測個体を抽出し、8～10月にかけて図化作業を行っている。その後遺物写真を撮影し、図版レイアウト・原稿執筆等を経て平成20年3月に全ての業務を終了した。

C 整理体制

【平成19年度 整理体制】

| | |
|-------|---|
| 調査主体 | 新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫） |
| 所 管 課 | 新潟市歴史文化課（課長 倉地一則） |
| 調査担当 | 新潟市埋蔵文化財センター 学芸員 潮田憲幸 |
| 事 務 局 | 新潟市埋蔵文化財センター（所長 山田光行） |
| 整理補助 | 桑野多真美、小菅和子、小柳和香、斎藤明子、土橋益美、内藤正義、沼澤綾子、広瀬智子、真島世津子、森岡綾子 |

第IV章 遺 跡

第1節 概 要

遺構・遺物は、調査区の南西から南東部に多く分布し、特に遺構は南西部のみで確認されている。調査の結果、溝・土坑の区画状の配置と煮炊施設と思われる遺構など計20基を検出している。遺構はほぼ同時代と思われるが、一部に切合いが観察され、若干の時期差がある。

遺物は、土師器がほとんどを占める。食膳具の割合が少なく、煮炊具、特に長巻が卓越するのが特徴である。須恵器は佐渡産の無台杯がわずかに認められる。土器以外では、土鍾・鉄滓・搬入礫が存在する。遺構間での接合例が多く見られることから、遺跡の同時代性が読み取れる。出土遺物から、おおむね9世紀後半から10世紀初頭までの数十年間におさまると推定される。

第2節 層 序 (図版8・写真図版3)

遺跡の土壌は、酸化したシルトと細砂・中粒砂の互層からなる。洪水砂層を随所に含み、堆積の更新が急激かつ短期間に行われたことを示している。腐食性の黒色帯は2層確認できるが、いずれも薄く、不安定な印象を受ける。

基本層序は8層に分類した。分層にあたっては、土質(構成粒子・粘性・しまり)および混入物に着目し、色調は2次的要素とした。また、薄い層が連続する部分は、煩雑さを避けるためまとめて1つの層とした。I層は砂利・碎石を主体とする盛土、II・III層は旧表土であるが、土壌改良により著しい改変を受けている。IV層が近世の遺物包含層、V層が近世の遺構確認面と想定される。古代の遺物包含層はVII層、遺構確認面はVIII層である。

基本層序の詳細については、以下のとおりである。

- I層 碎石および粗粒砂の混層。コンクリート舗装の基礎部分。
- II層 暗緑青色シルト(5G4/1)旧表土。土壌改良により硬化・変色する。攪乱が激しい。
- III層 にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)旧表土。土壌改良により硬化・変色することがある。砂層、粘土層がラミナ状に見られる。
- IV層 黒褐色シルト(10YR3/2)炭化物を含む腐食層。調査区内に普遍的に見られる。近世遺物をまれに含む。
- V層 灰黄色砂(10YR4/2)細砂・中粒砂の互層。粘土をブロック状に含む。河川堆積と思われる。上部が近世の遺構確認面と思われる。
- VI層 灰黄褐色シルト(7.5Y7/1)調査区に普遍的に見られる粘土質土壌。炭化物を若干含む。
- VII層 オリーブ黒色シルト(7.5Y4/1)、炭化物を多く含む腐食シルト層。粘性が強く、植生痕が目立つ。平安時代の遺物包含層である。
- VIII層 灰白色細砂(7.5YR7/1)均質な砂層。上部で炭化物と植生痕が観察される。平安時代の遺構確認面である。

第3節 遺 構

遺構はVIII層の上面で確認され、調査区南西部にのみ分布し(図版5)、土坑12基・性格不明遺構2基・溝状遺

構1条・ピット5基の計20基が検出されている(別表1)。溝状遺構と4基の土坑は、1つの区画溝をなす可能性が高い。また、煮炊施設と思われる性格不明遺構(SX4・SX7)も検出されている。多くの遺構から平安時代の遺物が出土する。遺構の配置から、性格不明遺構(SX4・SX7)を中心に群を形成する可能性がある。

以下に遺構の概要を述べる。

1) 土 坑 (SK)

SK1 (図版9) 4B24に位置する。検出面はⅧ層最上部である。平面は滴形、断面は不整な皿形を呈する。上端で長軸62cm×短軸推定47cm、深さ18cmを測る。覆土は4層に分かれ、覆土中から土師器長甕が出土している。

SK2 (図版9 写真図版6) 4B23・24に位置する。検出面はⅧ層最上部である。上端で長軸88cm×短軸41cm、深さ34cmを測る。平面は不整な長円形、断面は半円形を呈する。覆土は6層に分かれ、覆土中から土師器無台椀と長甕が出土している。

SK3 (図版9 写真図版6) 4B24に位置する。確認面はⅧ層最上部だが、Ⅷ層下部から焼土・炭化物が検出され始める。平面は不整円形、断面は不整半円形を呈する。上端で長軸56cm×短軸53cm、深さは9cmを測る。覆土は2層に分かれ、覆土中に被熱粘土・炭化物・灰を多く含む。土師器長甕が出土している。SX4の付帯施設と思われる。

SK5 (図版9 写真図版6) 4B23・24に位置する。確認面はⅧ層最上部だが、Ⅷ層下部から焼土・炭化物が検出され始める。平面は不整円形、断面は皿形を呈する。上端で長軸53cm×短軸44cm、深さ18cmを測る。覆土は2層に分かれ、覆土中に炭化物・焼土を多く含む。土師器長甕と黒色土器無台椀が出土している。SX4の付帯施設と思われる。

SK6 (図版9) 4B18・23に位置する。Ⅷ層上部で検出される。平面は瓢箪形、断面は皿形を呈する。上端で長軸47cm×短軸35cm、深さ4cmを測る。覆土は単層で、木炭粒を少量含んでいる。遺物の出土はない。SX4の付帯施設と思われる。

SK8 (図版9 写真図版7) 5B13に位置する。Ⅷ層上部で検出される。瓢箪型の平面形、皿形の断面をなす。上端で長軸110cm×短軸90cm、深さ10cmを測る。覆土は4層に分かれ、須恵器無台杯・土師器無台椀・長甕・鍋・黒色土器無台椀が出土している。

SK10 (図版9 写真図版7) 5B4・9に位置する。Ⅷ層上部で検出される。平面は長楕円形、断面は半円形を呈する。上端で長軸168cm×72cm、深さ36cmを測る。N-5°-W方向に軸がある。覆土は7層に分かれ、土師器長甕・鍋・黒色土器無台椀・搬入礫が出土している。SD9・SK13・SK20とあわせて、L字状の溝を形成すると思われる。

SK11 (図版9 写真図版8) 5B8に位置する。検出面はⅧ層上部である。平面は長円形、断面は不整台形を呈する。上端で長軸推定68cm×短軸41cm、深さ20cmを測る。覆土は5層に分かれ、土師器無台椀・長甕・小甕が出土している。SX7からの流れ込み的遺物分布が見られる。

SK12 (図版9 写真図版8) 5B2・7に位置する。Ⅷ層上部で検出される。平面は楕円形、断面は皿形を呈する。上端で長軸98cm×短軸61cm、深さ17cmを測る。覆土は2層に分かれ、土師器無台椀・長甕・小甕が出土している。

SK13 (図版9 写真図版8) 5B9に位置する。Ⅷ層上部で検出される。平面は楕円形、断面は皿形を呈する。上端で長軸74cm×短軸50cm、深さ8cmを測る。覆土は単層で、炭化物を多く含んでいる。土師器無台椀・小甕が出土している。SK20と隣接する。SD9・SK10・SK20とあわせて、L字状の溝を形成すると思われる。

SK19 (図版9) 5B4・9に位置する。Ⅷ層上部で検出される。平面は楕円形、断面は皿形を呈する。上端で長軸39cm×短軸28cm、深さ5cmを測る。覆土は2層に分かれ、土師器無台椀・長甕が出土している。SX7からの流れ込み的遺物分布が見られる。

SK20 (図版9 写真図版8) 5B9に位置する。検出面はⅦ層上部である。平面は長円形、断面は皿形を呈する。上端で長軸80cm×短軸44cm、深さ23cmを測る。覆土は2層に分かれ、土師器長甕が出土している。SD9・SK10・SK13とあわせて、L字状の溝を形成すると思われる。

2) 性格不明遺構 (SX)

SK4 (図版9 写真図版6) 4B19・24に位置する。Ⅶ層下部より焼土・炭化物が検出されはじめ、Ⅶ層最上部でプランが確認される。地面を浅く掘り窪めて粘土を貼り、構築されている。平面は不整形、断面は皿形を呈し、南東部に硬化面の張り出しを有する。上端で長軸104cm×短軸71cm、深さ8cmを測る。遺構精査時、周辺には焼土・灰・炭化物の散布が見られた。覆土は2層に分かれる。1層は被熱硬化した粘土で、火床面として意図的に充填されたものである。1層直下の被熱した地山を2層とした。遺構は、この層の上面まで掘り込まれている。

遺構の周辺にも被熱硬化が及んでいること、遺構周辺に焼土・灰・炭化物の散布が見られることなどから、継続した火の使用が想定される。覆土中からの遺物出土は少ないが、火床面直上から土師器長甕破片のまとまった出土が見られる。SK3・SK5・SK6およびP15～18が、何らかの付帯施設と思われ、これらの遺構とグループを形成すると見られる。

SK7 (図版9 写真図版6) 5B9に位置する。遺構はⅦ層上部で検出されるが、遺物はⅦ層中・下部から出土しはじめる。平面は不整形を呈し、東西方向に張り出している。断面は不整な皿形で、主体部の南側と、西の張り出し部に凹面を有する。張り出し部の東側はテラス状になっている。上端で長軸推定82cm×短軸79cm、深さ18cmを測る。覆土は4層に分かれるが、黒褐色で腐食性が強い。いずれも焼土・灰・粘焼土塊を含み、3層は被熱により赤褐色を呈する。SK4と比べ明瞭な火床面は残っていないが、覆土中に見られる粘土塊が、破壊された火床面の可能性もある。遺物は土師器長甕のみが大量に出土している。検出時、長甕4個体が逆位に置かれており、接合・復元の結果、遺構内には最低でも6個体の長甕が(おそらく、全て逆位で)置かれていたことが判明した⁽¹⁾。南東部をP14に切られる。

SD9・SK10・SK13・SK20からなるL字状の区画とSK11・SK19を含めてグループを形成すると思われる。

3) 溝状遺構 (SD)

SD9 (図版9 写真図版7) 5B8・9に位置する。Ⅶ層上部で検出される。上端で長軸256cm×短軸67cm、深さ16cmを測り、半円形の断面をなす。軸方向はN-84°-Wである。検出時は炭化粒が分布しているのみで明確なプランを視認できなかった。覆土は4層に分けられるが、色調がⅦ層と類似するため、土質と炭化物の有無を目安に掘削した。覆土中からは須恵器無台杯・土師器無台椀・長甕・小甕が出土している。遺構の配置状況からSK10・SK13・SK20と共にSX7・SK11を内包する区画溝の一部と思われるが、区画内(SX7側)に柱穴等の遺構が無く、上屋の存在については確たる証拠がない。また、SK10とSK20間には掘り込みが確認できず、地山が陸橋状に残る。

4) ビット (P)

P14 (図版9 写真図版8) 5B9に位置し、SX7を切っている。Ⅶ層最上部で検出される。平面は円形、断面は長半円形を呈する。覆土は3層に分かれ、平底の土師器鍋が出土している。切り合い関係から、若干新しい時代の遺構と思われる。

P15～18 (図版9) 4B23 (P17) および4B24 (P15・16・18) に位置する。Ⅶ層最上部で検出される。いずれも平面は円形を呈する。断面形はP15～17がV字形、P18のみ半円形となる。覆土は単層で、SX4に由来すると思われる焼土・炭化物から成る。断面の状況からSX4を囲む杭の跡と思われる。P17上部で土師器長甕の破片が出土している。

(1) 破片は、SK11や遺構外にも分布しているため、実際は7個体を超えと思われる。

第V章 遺 物

第1節 遺物の概要

出土遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）10箱である。うち9箱が平安時代の須恵器・土師器で、1箱が土製品・鉄滓・搬入礫である。重量換算で土器26,328g（94.5%）・土製品45g（0.16%）・鉄滓55g（0.2%）・搬入礫1,444g（5.18%）となり、土器が圧倒的多数を占める。土器の重量比は須恵器46点266g（1.03%）・土師器1,721点25,805g（98%）・黒色土器44点257g（0.97%）となり、土師器が絶対的多数を占める。

遺物の出土は、4B・5Bグリッドに最も多いが、4Cグリッド東側の低地部分にも分布域がある（図版10・11）。土器の遺構出土量は全体の25.9%（446点）を占め、SX7・SK2・SK8で特に多く出土している。地点により器種に偏りが見られ、土師器長甕はSX7周辺（5B9）に、須恵器と土師器小甕は4Cグリッド東側に多く分布する。須恵器は全て小泊産である。また、P14では平底の鍋が出土している。

第2節 用語の説明

遺物の記述で使用する用語および胎土の分類については、以下のとおり規定する。

1) 用語

- 1：ロクロ・回転台を使った撫でを「ロクロナデ」、ロクロ・回転台を使わない撫でを「ナデ」とする。
- 2：ロクロ・回転台を使った削りを「ロクロケズリ」、ロクロ・回転台を使わない削りを「ケズリ」とする。
- 3：ロクロ・回転台を使ったハケ目を「カキメ」、ロクロ・回転台を使わないハケ目を「ハケメ」とする。
- 4：ロクロ・回転台を使った磨きを「ロクロミガキ」、ロクロ・回転台を使わない磨きを「ミガキ」とする。
- 5：土器の外面に残る叩きの痕跡を「タタキメ」、内面に残る当て具の痕跡を「あて具痕」とする。

2) 胎土の分類

胎土には、還元炭焼成のA群、酸化炭焼成のB・C群の2系統が存在し、器種ごとに傾向が見られる。

A 群：還元炭焼成され、灰色～青灰色を呈する。精良で白色小粒子を多く含み、黒色の斑点や吹き出しが見られる。佐渡の小泊窯産の須恵器と推定される一群である。

B1群：酸化炭焼成で明褐色を呈する。精良で石英・雲母・長石等の混和材の粒が小さく、量も少ない。風化により粉っぽく、強度は低い。土師器無台椀に多く見られる。

B2群：酸化炭焼成で、多くは明褐色を呈する。胎土はB1群と極めて類似するが、混和材の粒度が格段に大きく、量も多いため、ざらついた触感がある。風化が進み、脆く粉っぽい。甕類に多い。

C1群：酸化炭焼成で灰褐色系の色調を呈する。比較的精良な胎土であるが、B1群と比べ混和材の粒度が大きく、量も多い。焼成は良好で、強度も高い。黒色土器無台椀に多い。

C2群：酸化炭焼成で灰褐色を呈する。胎土はC1群に極めて類似するが、混和材の粒度が大きく、量も多い。焼成は良好で堅緻なつくりだが、風化により粉っぽくなることもある。長甕、小甕に多い。

第3節 出土遺物

A 遺構出土土器 (図版12・13 写真図版10~12)

以下、遺構別に出土土器の概要を述べるが、詳細項目については別表2(31頁)を参照されたい。

SK2 (図版7・12) 土師器長甕(6・9)の破片が出土している。SX7出土の個体と接合する。

SX7 (図版7・12・13 写真図版6・10・12) 土師器長甕が6個体出土している(6~11)。外面はいずれも口縁部をロクロナデ、体部上半はカキメ、下半をタタキ・ケズリで調整する。内面はカキメ・あて具痕のほか、ハケメとタタキが残る。器形は6・8~11は丸底の砲弾形、7はやや平底である。底部はタタキ整形後、底部にケズリによる平坦な接地面を作り出したものである。口縁部は端部を上方向につまみ上げるもの(6~8)、つまんで外部に開くもの(10)、逆「く」の字状に内傾するもの(9・11)に分けられる。7・10・11の内面に若干のコゲ、9・11の外表面には若干のスガが観察される。7・10・11は胴部下半が部分的に摩滅しており、支脚の跡と考えられる。

SK8 (図版7・12・13 写真図版10) 須恵器無台杯(1)、土師器長甕(7)・鍋(12)が出土している。1は内外面ともロクロナデされ、底部には右回転のヘラ切痕が残る。器壁は薄い。7・12は体部の破片で、それぞれSX7・SK10出土の個体と接合する。

SK10 (図版7・12・13 写真図版7・10・12) 黒色土器無台碗(5)と土師器鍋(12)が出土している。5は内面に炭素を吸着させた後、ミガキにより仕上げている。底部には左方向の回転系切痕が残る。12は外面の口縁~体部上半にロクロナデとカキメ、下半はハケとタタキ目が残る。底部から半円状に立ち上がり、口縁部でさらに一段開き、端部がつまみ上げられる。胎土はC2類である。内面にもハケメとあて具痕が残っているが、使用により摩滅し、コゲの付着が目立つ。胴部下半には7・11と同じく支脚を当てたような部分的な摩滅が観察される。外面には胴部にスガが付着するが、支脚を当てたと思われる部分にはスガの付着が見られない。使い込んだ鍋である。

SK11 (図版7・12・13 写真図版10) 土師器無台碗(2)と長甕の破片(6・7・11)が出土している。2は内外面をロクロナデで調整し、断面は底部からわずかに内湾しつつ立ち上がる。器壁は薄く、外面にスガが観察される。底部には右方向の回転系切痕が残る。土師器長甕は破片で、SX7で出土した各個体と接合する。

SK12 (図版7・12 写真図版10・12) 土師器無台碗(3・4)が出土している。法量・調整技法・底部系切痕の方向は2と同様で、生産の時期と場所を一にする可能性が高い。4のみ内面にコゲが観察される。

P14 (図版7・13 写真図版8・10・12) 土師器平底鍋(13)が出土している。外面は口縁部をロクロナデし、体部上半にはカキメが残る。体部下半は底部平坦面の作出も含めてケズリのみで調整される。胴部の立ち上がりは12より急で、口縁部でさらに一段開き、端部をつまみ上げている。内面は口縁部にロクロナデ、体部上半にカキメ、底部にハケ目が観察されるが、使用により摩滅が激しい。外面にスガ、内面にコゲが付着する。胎土はB2類である。

B 包含層出土土器 (図版13・14 写真図版10~12)

須恵器無台杯 (14~19) 14は完形、15は口縁~底部までの破片、それ以外は口縁部破片である。いずれも小泊産で、底部・体部とも器壁は薄い。底部外面をのぞきロクロナデで調整される。14・15の底部には右回転のヘラ切痕が残る(写真図版12)。いずれも胎土はA類である。

土師器無台碗 (20~27) 完形の20をのぞき口縁・底部破片であるが、26・27のみ底部が完存する。いずれも成形後、外面底部以外をロクロナデで調整している。21および23は内外面にミガキが入る。20および23~27は、底部に右方向の回転系切痕が観察される。法量は口縁径13cm前後、底部径5.5~6.6cm前後が標準と

思われ、20のみ一回り小さい。胎土は22・26がC1類、その他はB1類である。

黒色土器無台椀 (28～31) 28のみ略丸形、それ以外は破片である。成形はいずれもロクロによる。多くは巻き上げのみであるが、28のように体部下半にロクロケズリが観察される例もある(写真図版12)。器面はロクロナデ後、内面に炭素を吸着させ、内外面を研磨して仕上げている。28・30・31の底部には回転糸切痕が残る。回転方向は28・31が右方向、30は不明瞭で判断しえなかった。28は遺構集中区から離れた3B21グリッドで、内面に漆状の樹脂が入った状態で出土している。胎土は29のみC1類、それ以外はB1類である。

土師器有台椀 (32) 底部の破片と思われる。摩滅・剥落が激しいが、外面にわずかにロクロナデが観察される。胎土はB1類である。高台部は紐状の胎土を貼り付けたものであるが、細かい調整は不明である。

土師器長甕 (33～35) 33はSX4の東側で一括出土したものである(写真図版8)。口縁部にはロクロナデ、体部上半にはケズリ・カキメ、体部下半から底部にかけてタタキ痕が残る、外面には広範囲にススが付着している。内面は体部上半にカキメ、下半にあて具痕が観察される。口縁部は厚く、逆ハの字状に開き、端部でわずかに内傾する。胎土はB2類である。使用による摩滅は内面、底部、胴部下半が激しく、摩滅の主因は内面が煮炊、底部が接地、胴部下半は支脚を当てた結果と見られる⁽¹⁾。34・35は口縁部～胴部上半の破片である。34の口縁は基部から大きく開き、端部で上方につまみ上げられ、外反する。口縁部はロクロナデされ、外面はカキメ痕が明瞭に残る。内面にはコゲがわずかに見られる。35の口縁部は34と同様につまみ上げによるが、端部は直立する。口縁基部の開きが弱く、体部下半に向かって収束している。口縁部にロクロナデ、体部にはカキメが残る。外面にススの付着が見られる。

土師器小甕 (36～43) 4Cグリッドの東側に集中して分布する。遺存状態は不良で破片が多く、完形品は存在しない。

整形は40のみ手づくねで、それ以外はロクロによる。調整は内外面ともロクロナデのみである。胎土はB2・C2類が混在する(別表2)。口縁にはつまみ上げによりやや内湾気味に立ち上がるもの(36・37)と、玉縁状のもの(38・39)の2種類がある。41～43には底部糸切痕が観察される。回転方向はいずれも右回転であるが、42のみ糸の跡が円弧状に連続し、低速回転で切り離したことを示している(写真図版12)。

C 土製品・鉄滓・搬入礫(図版14、写真図版11)

土器のほかに、土鍾・鉄滓・搬入礫が出土している。以下に概略を述べるが、詳細については別表3～5を参照されたい。

土鍾 (44) 管状の土鍾で、長軸を貫通して紐通し孔がある。孔径は6mm、重さは45gである。

鉄滓 (45～47) 不定形で赤褐色を呈する。不純物が多く混じり、磁性は低い。鉄というよりも炉材や燃料材が製鉄時に溶融したものであろう。

搬入礫 (48～50) 3点とも発泡した流紋岩(広義の軽石)である。遺跡周辺には産しない石材であるが、48・49が遺構内から出土しており、意図的に搬入されたものと判断した。表面に磨痕状の擦面や敲打痕状の凹みが観察される個体もあるが、非常に軟質な石質のため、自然剥落か使用痕かの日視による判定は難しく、礫石器と断言できない。よって本報告では持ち込まれた自然礫として扱い、図版では使用痕範囲を示していない。

48はSK12覆土から出土しており、表面に擦痕が不定方向に観察される。49はSK10の底部から出土したものである。明確な使用痕は観察されなかったが、表裏に散見される凹部が敲打痕の可能性もある。50は全体に微かな磨痕と凹み痕が観察しえる。

(1) 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団の春日真実氏によれば、他の長甕と比べ、若干新しい様相を示すという。

第VI章 自然科学分析

第1節 諏訪畑遺跡における樹種同定

A はじめに

諏訪畑遺跡は、新津丘陵の東側を流れる能代川の右岸に位置し、発掘調査の結果9世紀後半～10世紀にかけての遺構・遺物および炭化物の分布が確認されている。ここでは出土した炭化材の樹種同定を行い、木材利用や当時の植生等について検証する。

B 試料

SK3・SX4・4B19周辺で採取された焼土、東壁周辺から出土した炭化材25点である。分析の詳細は第1表に示す。

C 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3種の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、[島地・伊東1982]・[Wheeler, et al 1998]・[Richter, et al 2006]を参考にする。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、[林1991]・[伊東1995～1999]や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

D 結果

結果を第1表に示す。炭化材25点のうち17点は、針葉樹1種類（マツ属複雑管束亜属）と広葉樹6種類（ヤナギ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・サクラ属・カエデ属・アセビ）に同定された。一方、残りの8点は、遺存状況が不良であり、No.13・14・16・19・20においては木材組織が全く観察できず種類や由来は不明である。なお、No.21は、道管が認められたことから広葉樹材と判断されたが、道管配列等が観察できないため樹種の特定には至らなかった。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部付近に認められる。放射組織は、仮道管・柔細胞・水平樹脂道・エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性・単列、1～15細胞高。

ブナ属 *Fagus* ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性・単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性・単列。1-20細胞高のもと複合放射組織とがある。

サクラ属 *Prunus*バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸。横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合。年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性。1-3細胞幅・1-30細胞高。

カエデ属 *Acer* カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性。1-5細胞幅・1-30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

アセビ *Pteris japonica* (Thunb.) D.Don. ツツジ科アセビ属

散孔材で、年輪始めに横方向に道管が揃うが、その後はほぼ単独で散在する。道管径は極めて小さい。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性。1-3細胞幅・1-15細胞高。

E 考 察

分析の結果、25試料から針葉樹1種類、広葉樹6種類の計7種類の木材が認められた。このうち4Cグリッド周辺から7種類の木材が全て確認されている。

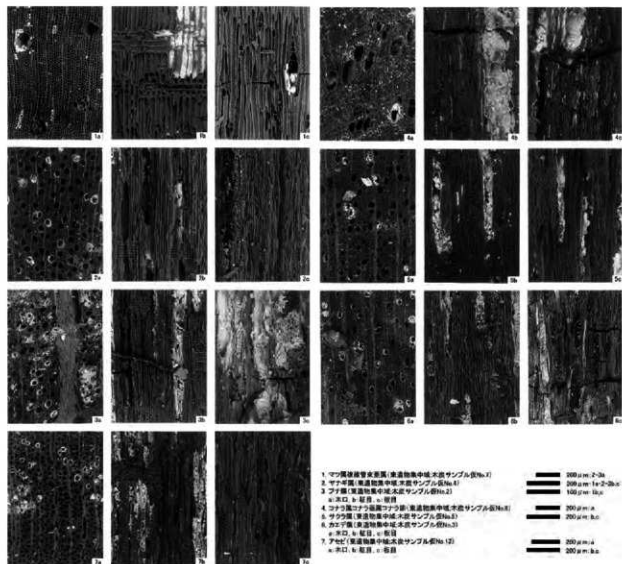
検出された樹木は、河野林を構成する種類(ヤナギ属)、丘陵地等で二次林を構成する種類(コナラ節・サクラ属・カエデ属)、丘陵~山地に生育する種類(ブナ属・アセビ)に分類できる。このうちヤナギ属やコナラ節・サクラ属・カエデ属は現在でも周囲の低地や丘陵等に見られる種類であることから、当時も生育していたと推定される。一方、ブナ属は、現在の新潟県では、標高400~500m以上の地域に林分を形成するが、場所によっては標高100~200mでも生育している。新津丘陵ではブナ属は現在丘陵の尾根沿いにわずかに認められる程度だが(小林正吾1998)、当時は丘陵の比較的高い場所や、後背の山地を中心にブナ林を形成していたと推測されている(鈴木2006)。

本遺跡周辺では、新津丘陵北方の沖積地に立地する上浦A遺跡(新潟市)において花粉分析による古植生の検討が行われている(ハリノ・サーヴェイ株式会社2003)。古代に相当する試料からは、産出状況は不良であるが、針葉樹のマツ・スギ属、広葉樹のクマシデ属-アサダ属・ハンノキ属・ブナ属、コナラ亜属等が検出されている。また、管神丘陵西側の沖積地に立地する大坪遺跡(阿賀野市)では、井戸跡や溝等の堆積物を対象とした花粉分析調査が行われている。これらの調査結果を総合すると、丘陵地にはコナラ亜属を中心にクマシデ属-アサダ属・クリ属・ニレ属-ケヤキ属・カエデ属・トチノ

第1表 樹種同定結果

| グリッド | 遺構・層位 | 試料 | No. | 樹種名 | 備考 |
|--------|--------|------------|--------|---------------|------------|
| 4B24 | SK3 2層 | 木炭 | | 不明 | 土壌表面に薄く残存 |
| 4B24 | SX4 2層 | 木炭 | | 不明 | 土壌表面に薄く残存 |
| 4B19 | 機土 | 炭サンプル | | サクラ属 | |
| | | | | ヤナギ属 | 遺存状況不良(前面) |
| | | | No. 1 | カエデ属 | |
| | | | No. 2 | ブナ属 | |
| | | | No. 3 | カエデ属 | |
| | | | No. 4 | ヤナギ属 | |
| | | | No. 5 | サクラ属 | |
| | | | No. 6 | カエデ属 | |
| | | | No. 7 | マツ属放射線管束亜属 | |
| | | | No. 8 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 | |
| | | | No. 9 | ヤナギ属 | |
| | | | No. 10 | カエデ属 | |
| | | | No. 11 | カエデ属 | |
| | | | No. 12 | アセビ | |
| | | | No. 13 | 不明 | 微細な炭化物の集合 |
| | | | No. 14 | 不明 | 土壌表面に薄く残存 |
| | | | No. 15 | カエデ属 | |
| | | | No. 16 | 不明 | 土壌表面に薄く残存 |
| | | | No. 17 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 | |
| | | | No. 18 | アセビ | 小片 |
| | | | No. 19 | 不明 | 微細な炭化物の集合 |
| No. 20 | 不明 | 微細な炭化物の集合 | | | |
| No. 21 | 広葉樹 | 遺存状況不良(前面) | | | |

キ属等の落葉広葉樹や針葉樹のスギが生育し、標高の高い場所にはブナ林が形成されていたと考えられよう。この事実は分析結果から推定される古植生ともおおむね一致することから、諏訪畑遺跡周辺にも同様の植生が見られた可能性がある。



第5図 木材サンプル断面写真

第七章 総 括

第1節 土 器

A 器種構成比率

主要遺構の器種構成比率については、別表6に口縁部計測法に基づいて算出した各遺構の器種・機能別構成率を示した。口縁部が残存しない器種もあるため、参考として破片数と重量についても併記している。

主要遺構の遺構出土土器の機能別構成率を、第6図に示した。全体の機能別割合を見ると碗・杯等の食器が34.8%、長甕・小甕・鍋などの炊炊具が65.2%と炊炊具の割合が多く、遺構により極端なばらつきが見られる。器種構成では長甕が50.3%と最も多く、土師器無台碗(29.7%)、鍋(9.2%)、小甕(5.7%)と続く。須恵器は5.1%に過ぎない。遺構別では、SX7で長甕、SK8で須恵器無台杯、SK12で土師器無台碗、SK13で小甕がそれぞれ100%を示すが、これは口残値のみの数値であるため、実際には他器種の出土も見られる。ただしSX7は長甕のみの出土であり、明らかに他と異なる様相を示す。

以上から、諏訪畑遺跡の土器は、①土師器を主体とし、②遺構により出土する器種にばらつきがあり、③炊炊具・特に長甕の量が圧倒することがわかる。

上記①～③について考察してみると、①については、時代的な背景を想定できる。越後の土器構成は、9世紀以降須恵器主体から土師器主体へ移行する傾向にあり〔春日1991〕、9世紀後半～末期主体と想定される当遺跡も同じ様相を示していると解釈できる。②については、集計資料の不足が主な原因であるが、SX7のように遺構の性格に起因する例もある。③については、SX4・SX7を炊炊施設と考えた場合、その周辺で炊炊具の出土が卓越するのは特に不自然なことではあるまい。

B 器高指数と底径指数

土師器無台碗と須恵器無台杯の形態について、法量と器高指数・底径指数を示した(第6図)。対象となる資料が少ないため、遺構・包含層出土に関わらず、掲載遺物で指数の算出が可能なのは全て示した。

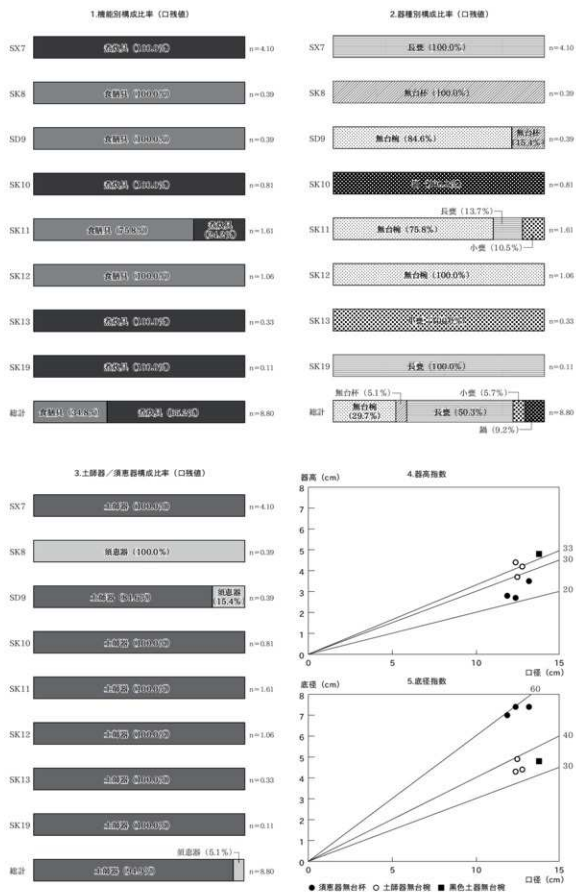
土師器無台碗で対象となるのは3点で、器高指数は約33・34・36である。底径指数は約34・35・39を示す。〔春日1997〕によれば器高指数35以上、底径指数30～35のものについてはいずれも9世紀第4四半期から10世紀初頭におさまるとされる。

須恵器無台杯は3点を示した。口径指数約22が2点、27が1点と一様でない。底径指数は約58～60を示す。小泊窯跡群の須恵器無台杯では、時代が下るにつれ、法量の差が広がる傾向が指摘されている〔坂井1991〕が、その傾向は新潟市小丸山遺跡〔藤塚1995〕、寺道上遺跡〔渡邊2001〕など諏訪畑遺跡と同時代の遺跡でも表われており、器種構成比率から推定される年代と合致する。

C 編年の位置付け

出土遺物の集計・分析結果を踏まえ、諏訪畑遺跡の年代的な位置付けについて検討する。年代の表記は、世紀と四半期で示す実年代と、春日真実氏による編年案(春日編年)を併記した。なお、本書が用いる春日編年は〔春日2007〕にもとづく。

炊炊具では、SX7から出土した長甕(6・7・11)がSK11の破片と接合する。さらにこれら長甕の破片と土師器無台碗(2)が伴関係にあることから、長甕と土師器無台碗はその同時性が指摘しえる。また、SK10出



第6図 主要遺構別器種組成および食器具法量分布図

土の土師器鍋(12)はSK8出土の破片と接合するが、同遺構からは小泊産の須恵器(1)が出土しており、両者の共伴も確認しえる。さらにSK8からは長囊(7)の破片が出土しており、以上の事実を合わせるとSX7・SK8・SK10・SK11の出土遺物は時代を一にすると判断できる。

須恵器は全て佐渡小泊産であるため、同窯産の須恵器が越後で大半を占めるようになる9世紀から10世紀前半の時代におさまる。加えて、構成比率で示したとおり器種構成では土師器が圧倒的かつ法量のばらつきが見られることから、新しい段階を想定できる。器壁が薄く、体部はやや内湾し、口縁部付近で僅かに外反する形態は小泊編年では栗ノ木沢・江ノ下窯段階の特徴を色濃く示すことから、おおむね9世紀の第4四半期～10世紀初頭(春日編年のVI2・3期)に比定できよう。

土師器無台碗については器高指数約33～36を示し、指数35を超えるものが存在している。器高指数の項で述べたとおり、9世紀第4四半期から10世紀初頭(春日編年VI2・3期)におさまると考えられ、須恵器の年代と矛盾しない。

単独で出土している土師器長囊(33)については、共伴関係が不明なことから明確な時期を判断しえないが、外面全体にスガが付着し、底部にも火にかけた痕跡が観察されることから、近接するSX4での使用を想定すべきであろう。SX4がSX7に接続すると考えられること、口縁部が上方に屈曲するなど胴部上半にⅧ期的な特徴が見られることなどから、9世紀末～10世紀第一四半期(春日編年Ⅶ1期)と推定する。

SX7(春日編年VI2・3期の遺物が出土)を切るP14から出土した平底の土師器鍋(13)は、状況から春日編年VI2・3期の直後、すなわち9世紀末～10世紀第一四半期(春日編年Ⅶ1期)が妥当であろう。長囊33との共伴関係は確認できないが、それぞれ新しい様相を示すことから、両者は同時期と思われる。

D 平底の土師器鍋

ここでは、P14出土の土師器平底鍋(13)について、若干の考察を行う。

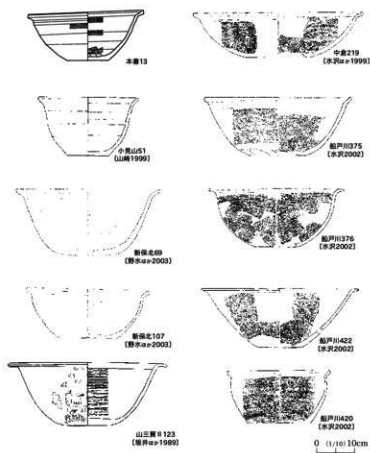
土師器鍋13は、口径30.2cm、底径10.8cm、器高13.3cmを測り、口径に比して若干深みがあり、鉢を思わせる。体部下半および底部にかけてケズリにより調整がなされ、平坦な底部が特徴である。同時期の北陸系の土師器鍋は体部下半をタタキ調整する丸底が一般的であるが、13はケズリのみで仕上げられており、趣を異にする。胎土はB2群で、他の土器との差異は見られず、搬入品とするには根拠に弱い。遺構の切り合いから、他の遺物より時間的に若干新しいと思われる、本書では9世紀末～10世紀第一四半期(春日編年Ⅶ1期)に比定している。

新潟県内の煮炊具の編年については(春日2007)に詳しいが、それによれば県内では阿賀北の旧沼垂郡海岸部(山三賀Ⅱ遺跡[坂井ほか1989])から紫雲寺湯周辺(中倉遺跡[水澤ほか1999]・船戸川遺跡[水澤2002])と、新津丘陵周辺(新保北遺跡[野水ほか2003])に多く分布し、時期は8世紀前半から10世紀第一四半期までと幅がある。資料の詳細については第7図および第2表に記すが、いずれもロクロを用いて成形され、体部上半にカキメ、体部下半にケズリ・ハケメ・カキメの調整が見られる。調整痕の切合いから、底面から体部下半にかけてケズリ後にカキメ・ハケメなどのナデ調整を入れることが多く、タタキは見られないが、諏訪畑遺跡出土資料を含めて、製作技術的には北陸系土師器煮炊具の系統にあると思われる。

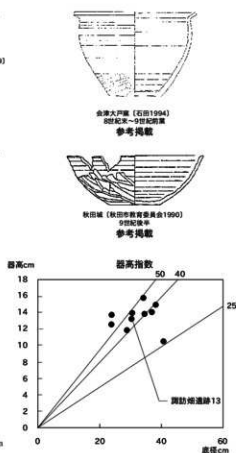
口径は20～24cm、30cm前後、35cm前後、40cm前後に分けられ、一般的な鍋と比べて小さい傾向がある。器高指数では25・40～45前後・50以上でまとまりが見られ⁽¹⁾。口径に比して器高が高い傾向を示す(第8図)。

第8図・第2表および口縁部形態から、口縁部が朝顔形に大きく外反し、端部をつまみ上げないもの(山三賀Ⅱ遺跡123、船戸川遺跡376・422)は8世紀代～9世紀中葉あたりを下限とし、9世紀中・後半以降は口縁端部をつまみ上げるもの(諏訪畑遺跡13、小実山遺跡51、船戸川遺跡420)が主体となる傾向が読み取れるが、これらの形態的差異が山三賀Ⅱ遺跡123的な器種を祖元とする形態が継続・発展した結果なのか、また沼垂部・新津丘陵間に類縁性があるのかも含め現状では不明であるが、羽羽・会津など越後の周辺地域では9世紀以降陸奥系の平底の煮炊具に加え、北陸系の製作技法による丸底の土師器煮炊具が出現しはじめ、両者の折衷型のような煮炊

具も見られることがわかっている（松本1991・山中2003）。新潟県内に見られる平底土師器鍋の位置付けには、このような周辺地域との類似性も含め、広い視点での比較検討が必要となろう。



第7図 諏訪畑遺跡周辺の平底鍋



第8図 平底鍋器高指数

第2表 諏訪畑遺跡周辺の平底鍋

| 市町村 | 遺跡名 | 幅巾 [cm] | 法量 (cm) | | 器高 指数 | 底径 指数 | 口縁形態 | | 外部調整 | | 遺物の時期 | | |
|-----|-------|------------|---------|--------|----------|----------|--------|---------------|-------------|------------|---------|-------------|--------|
| | | | 口径 | 底径 | | | 外反 | つまみ上げ 体部上半 | 体部下半 | 底部 | 実年代 | 春日編年 | |
| 新潟市 | 諏訪畑遺跡 | 13 | 30.2 | 10.8 | 13.3 | 44.0 | 35.8 | 「く」の字状 | やや外縁 カキメ | ケズリ | ケズリ | 10世紀前半 | Ⅴ1 |
| 五泉市 | 新保北遺跡 | 69 | 34 | 16 | 15.9 | 46.8 | 47.1 | 緩い「く」の字 | やや外縁 カキメ | ケズリ | | 9世紀前半～中葉 | Ⅳ2・3 |
| | 小天山遺跡 | 51 | 23.7 | 9.9 | 13.8 | 58.2 | 41.8 | 緩い「く」の字 | なし | | | 9世紀後半以降? | Ⅴ12・37 |
| 聖籠町 | 山二良遺跡 | 123 | 38 | 12 | (15) | (39.5) | 31.6 | 大きく外反 | ハケメ | ケズリ・ハケメ | | 8世紀前半 | Ⅱ2 |
| | 中倉遺跡 | 219 | 40.6 | (15.6) | 10.6 | 26.1 | (38.4) | 大きく外反 | 外へ緩く カキメ | カキメ | | 8世紀後半～9世紀前半 | |
| | | 375 | 30.4 | (9.8) | 14 | 46.1 | (32.2) | 大きく外反 | なし | カキメ ハケメ | | 8世紀後半～9世紀前半 | Ⅳ・Ⅴ? |
| 助内市 | 船戸川遺跡 | 376 | 34.4 | 12.4 | 13.9 | 40.4 | 36.0 | 緩い「く」の字 | 上方へ カキメ | カキメ | ケズリ | 8世紀後半～9世紀前半 | |
| | | 420 | 23.8 | 14.8 | 12.6 | 52.9 | 62.2 | 「く」の字状 | 上方へ カキメ | カキメ | | 9世紀中葉? | Ⅴ? |
| | | 422 | 36.8 | 10 | 14.1 | 38.3 | 27.2 | 大きく外反 | なし | ハケメ | ケズリ・ハケメ | | |

第2節 遺 構

A 遺 構 の 変 遷

前節における遺物検討により、9世紀第4四半期から10世紀初頭（春日編年Ⅴ2・3期）の遺物が出土し、相互に接合関係が見られるSK2・SX7・SK8・SK10・SK11（図版7）は、同一の時期と言うことができる。加えてSX7から遺物の流れ込みが見られるSD9・SK19、SD9と共にL字状区画を形成するSK20・SK13、土師器無台椀に共通性が見られるSK12、鍋12の破片が隣接して分布するSK1を含めたこれらの11基の遺構が9世紀

第4四半期から10世紀初頭（春日編年VI2・3期）に位置付けられる。

SX4を中心とする遺構群はSX7を中心とする遺構群と接合関係が見られず、別の時期を想定できる。SX4で使用されたと思われる長囊33はSX7を切るP14出土の鍋13と共に10世紀第1四半期を想定し得ることから、SX4・P14は9世紀末～10世紀第一四半期（春日編年VII1期）としてよいだろう。SX4の付帯施設と思われるSK3・5・6およびP15～18も同様と思われる。

以上から、遺跡内において、SX7を中心とする遺構群（9世紀第4四半期から10世紀初頭）からSX4を中心とする遺構群（9世紀末～10世紀第一四半期）への変遷が想定され（第9図）、遺構群の消長には、その中心となるSX4・SX7が深く関わっていると推察する。

B SX4・SX7について

ここでは、諏訪畑遺跡を特徴づけるSX4とSX7について、諸事例を交え、考察する。

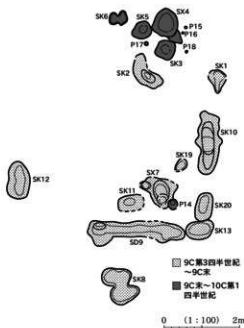
最初に諏訪畑遺跡で検出された2遺構を改めて確認しておく。SX4は長軸104cm×短軸71cmの不整形形を呈し、地面を浅く掘り込んで粘土で火床を構築している。付帯施設と思われる周辺のピット・土坑と一つの単位を形成する。

SX7は左右に張り出しのある不整形で、長軸推定82cm×短軸79cmを測る。構築方法はSX4と同様である。しっかりした火床面が形成されないが、覆土中に混入する焼粘土の破片を火床面構築材と見ることできる。周辺には十字状の区画溝やピット・土坑が存在するが、これらと一つの単位を形成すると思われる。両遺構とも出土遺物は土師器長囊のみに偏り、かつ遺物の分布が覆土表層に限られるといった特徴がある。特にSX7は4個体の長囊が逆位で置かれており、特異な様相を示している。上屋の存在を明確に示す遺構は存在しない。第四章で述べたとおり、これらの遺構は、「火を焚いた」場所で、多量の煮炊具の存在から、煮炊きを目的とすると思われるが、いずれも火床面を覆う施設（作り付け竈の構造材）がみられず、作り付けの竈と断定する決定的な根拠に欠ける。

諏訪畑遺跡周辺の事例を調べると、新潟市の場遺跡〔小池邦明¹⁰⁰1993〕・細池寺道上遺跡〔小池義人¹⁰¹1994〕・五泉市小実山遺跡〔山崎1999〕・新保遺跡〔折原2004〕・燕市北小脇遺跡〔中川2002〕・十二田遺跡〔森田2003〕など8世紀代～10世紀初頭にかけての遺跡で類似する遺構が検出されている（第10図）。これらの報告事例を交えて比較検討を行い、遺構の性格を検証してみたい。

的場遺跡では5基確認されているが、火床・遺物が特徴的な3基（SX2・SX8・SX9）について記述する。SX2は長軸88cm×短軸60cmの不整形形を呈し、断面は深さ12cmの皿形、火床面は粘土で構築している。遺物は土製支脚が出土している。SX8は長軸104cm×短軸80cmの長円形を呈し、断面は深さ24cmの皿形である。火床面の作り付けは見られず、地床と思われる。置き竈・土師器煮炊具・土錘などが出土している。SX9は長軸128cm×短軸92cmの不整形形、断面は深さ約20cmの皿形を呈する。火床面の作出は認められないが、粘土塊が出土しており、火床面の破片の可能性はある。須恵器杯・土師器小囊が出土しているが、小囊のうち1点は逆位に置かれている。いずれも上屋らしき施設は見当たらず、屋外施設と思われる。

細池寺道上遺跡では2基確認されている。SK708は長軸144cm×短軸92cmの長円形を呈し、断面は深さ32cmの長い半円形である。火床面は56cm×50cmの範囲で広がり、後方に支脚と思われる礎を据えてある。



第9図 諏訪畑遺跡の変遷

これ以外の遺物の出土はない。SK808は98cm×85cmの硬化面を有する不整形の土塊で、硬化面は厚さ10cmのレンズ状の堆積をなすが、粘土等の貼り付け、地床かは不明である。土師器長囊・鍋が出土しているが、置き竈の報告はない。両遺構とも周辺に上屋を思わせる遺構は存在せず、屋外施設と思われる。

小天山遺跡検出資料は、詳細な記述はないが、遺物の分布範囲から96cm×88cmほどの大きさであろう。断面は皿形と思われる。状況から、礫が火床を囲むように配されており、火囲いを有していたことが想定できる。石囲いの中央に支脚状の長礫が1点配されている。火床面の構築については不明である。遺構内からは土師器の長囊・鍋が出土しているようである。周囲には遺構を囲むようにピットが配されており、上屋の存在が推定される。遺跡から置き竈は出土していない。

新保北遺跡では2基検出されており、いずれも長軸60cm前後、短軸50cm前後の不整形円形を呈し、断面は浅い碗形となる。火床面の作出や火囲いは認められない。上屋を想定される遺構も検出されていないことから、いずれも屋外施設と思われる。遺構には遺物が伴っておらず、置き竈の出土も報告されていない。

十二田遺跡検出の資料は、一部破壊されているが、本来は直径75cm前後の不整形円形であったと思われる。断面は皿形を呈し、深さ16.9cmを測る。火床面は粘土で構築され、表面は中央に向かって皿状に窪む。遺構周辺から礫が出土しているが、火囲い・支脚に関連するものか判断できない。火床面直上から土師器・須恵器が出土している。置き竈の出土は報告されていない。調査者は遺構の東隣に位置する柱穴をもって何らかの建物跡を想定している。

北小島遺跡では、古代・中世あわせて8基が検出されているが、古代の1基について記述する。平面は長軸112cm×短軸100cmの楕円形、断面は深さ12cmの皿形となる。火床面・火囲いの状況については不明である。遺構の周辺には敷基のピットが存在するが、上屋を想定しえる配置ではない。遺構内からは須恵器無台杯・土師器無台碗・長囊・黒色土器無台碗のほか、鉄滓と羽口が出土している。置き竈の出土はない。

上記の例から、これらの遺構にはいずれも地面を浅く掘り込んで構築され、火床面は粘土を貼り付ける場合と、地面を直接土とする場合があり、また火囲いも、構築する例・しない例がある。周辺には付帯施設を有する場合があり、時として上屋の存在を想定しえる。竈の構造材は発見されないが、支脚と思われる礫や、置き竈の破片が出土する例があり、出土土器は煮炊具が多い、といった特徴があることがわかる。

煮炊具が多く、竈の構造材が見られないことから、作り付けでない煮炊施設、つまり置き竈か炉のいずれかになろう。事例の中で明らかに置き竈を使用したと思われるのは的場遺跡SX8のみであるが、置き竈は形態上火床面の上に掛け口が来る配置になるので、炉と同じような痕跡を残し、遺構の形態的には炉と大差がなく、遺物の出土がなければ置き竈と判断できない。県内の置き竈は、的場遺跡のほか山木戸遺跡〔津山2004〕・無頭遺跡〔長澤2002〕などでも出土しているが、明確な使用が見られるのは的場遺跡・山木戸遺跡など8世紀代の遺跡に偏ることから、律令期の一時的な使用にとどまり、9世紀後半までは続かなかったのではないだろうか。消極的ではあるが、諏訪畑遺跡SX4・SX7は置き竈ではなく、炉の可能性を指摘できる。

遺物に残された煮炊きの痕跡を調べると、諏訪畑遺跡の長囊・鍋には底部・胴部下半に磨耗が見て取れる。特

第3表 炉跡状遺構検出例一覧

| 遺跡名 | 遺構名 | 時代 | 長軸 (cm) | 短軸 (cm) | 深さ (cm) | 平面形 | 断面形 | 火床面 | 火 囲い | 遺物 | 所在 |
|---------|-------|-------------|------------|------------|------------|-------|------|-----------|---------|---------------|-----|
| 諏訪畑遺跡 | SX4 | 9世紀末～10世紀初頭 | 104 | 71 | 8 | 不整形 | 皿形 | 粘土層付 | なし | 長囊ほか | 屋外? |
| | SX7 | 9世紀末～10世紀初頭 | (82) | 79 | 18 | 不整形 | 皿形 | 不明(地床?) | なし | 長囊 | 屋外? |
| 的場遺跡 | SX2 | 8世紀前半? | 88 | 60 | 12 | 不整形円形 | 皿形 | 粘土層付 | なし | 土製支脚 | 屋外 |
| | SX8 | 8世紀前半 | 104 | 80 | 24 | 長円形 | 皿形 | 地床 | なし | 置き竈・土師器煮炊具・土師 | 屋外 |
| | SX9 | 8世紀前半? | 128 | 92 | 20 | 不整形円形 | 皿形 | 粘土層付? | なし | 小囊(密位) | 屋外 |
| 網池寺遺上遺跡 | SK708 | 9世紀後半 | 144 | 92 | 32 | 長円形 | 長円形 | 不明(56×50) | なし | 支脚(礫) | 屋外 |
| | SK808 | 9世紀後半 | 98 | 85 | 10 | 不整形円形 | レンズ状 | 不明 | なし | 長囊・鍋 | 屋外 |
| 小見山遺跡 | S11 | 9世紀後半 | (96) | (88) | 不明 | 円形? | 皿形? | 不明 | 礫 | 礫・鍋 | 屋内? |
| 新保遺跡 | 1号焼土壇 | 9世紀 | 60 | (52) | 14 | 不整形 | 碗形 | 地床 | なし | なし | なし |
| | 2号焼土壇 | 9世紀 | 58 | 46 | 12 | 不整形円形 | 碗形 | 地床 | なし | なし | 屋外 |
| 十二田遺跡 | SX1 | 9世紀中～後半 | (62.9) | 78.6 | 16.9 | 不整形円形 | 皿形 | 粘土層付 | なし? | 長囊・小囊ほか | 屋内? |
| 北小島遺跡 | SX5 | 9世紀後半 | 112 | 100 | 12 | 楕円形 | 皿形 | 不明 | 不明 | 須恵器・土師器・鉄滓・羽口 | 屋外 |

相があるが、出土遺物を垂直分布で見ると(図版7・9)、いずれも遺構覆土の上層で検出されており、長甕は、遺構にある程度土が堆積した状態で「置かれて」いるように見える⁽²⁾。

甕は、その廃棄にあたり、部材は解体され、掛け口を閉塞し、火床面を土や解体した部材・土器を敷き詰めて覆い、さらに甕や杯などを逆位に置いて、廃棄の事実を強調したと思われる例が多く見られる〔小林1989・堀1990・小池邦明¹⁾・前掲・大野1993〕。このような廃棄に伴う儀礼が、SX7でも行われたのではないだろうか。つまり、SX7の廃棄にともない土や長甕で火床面を閉塞したのである。覆土に混じる焼土・粘土塊は、破壊された火床面である可能性もあろう。

加えて、SX7を切るP14の存在、SX4に使用されたと思われる長甕(33)がやや新しい時期の特徴を示していることも、古いSX7の使用が停止され、儀礼のもとに廃棄された後、SX4の使用が開始されるという、つまりは前節で述べたSX7を中心とする単位から、SX4を中心とする単位への遺跡の土地利用の変遷を暗示するものであろう。

第3節 ま と め

最後に諏訪畑遺跡を概観し、まとめたい。諏訪畑遺跡は、9世紀後半から10世紀はじめにかけて営まれた遺跡の一部で、旧能代川のほとりの微高地に位置していた。同時代の能代川流域には新保遺跡・小実山遺跡などのムラが存在し、特に能代川を挟んで位置する小実山遺跡とは、密接な関係にあったと思われる。生業は稲作主体であったと推察するが、土鏝や鉄滓、漆状有機物等から、近隣の諸河川における漁撈や丘陵部での製鉄・漆採取など、多岐にわたる経済活動を示している。

煮炊具が多いこと、炉跡と思われる遺構(SX4・SX7)が発見されていることから、今回の調査部分は煮炊きを行う炊事場のな場所であった可能性が高い。出土土器の編年の位置付けと遺構との関わりから、煮炊き場がSX7からSX4に交代される時期を画期とし、9世紀第4四半期～10世紀初頭と、9世紀末～10世紀第1四半期の2期が想定される。前者がSX7を中心とする遺構群で、SX7の廃棄まで、後者はSX4を中心とする遺構群で、SX4の廃棄までに対応し得よう。

煮炊場の施設が存在すること、確認調査・地形・遺物分布などから遺跡に広がりか推定されること、新津丘陵の東側出口であり、河川を通じて上・下流への接続が容易な地理的位置などから、諏訪畑遺跡には集落的要素を見出すことができる。

炭化材を対象に実施した自然科学分析では、コナラ節・カエデ属・マツ属などの丘陵に見られる植物、ヤナギなど水辺の植物が同定され、多様な資源の利用が見て取れる。コナラ・マツ・カエデなどは現在の新津丘陵に普通に見られるが、これらは人の手が入った里山に多く見られる二次林性の樹木でもあることから、遺跡が営まれた平安時代には丘陵部にかなり人の手が入っていたことを意味し、新津丘陵の「里山」化を考える上でも興味深い。

佐渡小泊産の須臾器は、能代川・早出川等を通じて流入してきたものと思われる。能代川流域の同時代の遺跡には小泊産須臾器に加え、炉跡状遺構や土器器平底鍋の分布など共通する要素を指摘でき、河川を媒介とした遺跡間の相互交流が読み取れる。本書では残念ながらその詳細に踏み込む余裕は無いが、同水系は、古来から地理的な単位として認識された可能性が高く、それが古代鴨橋荘・中世普名荘等を経て現代に受け継がれているのではないだろうか。

(1) 口径25cm以下、器高指数50以上は船戸川遺跡のように鉢と分類する例もある。

(2) 同様の事例は律令祭祀に伴う遺物が多く出土している新南的場遺跡SX9〔小池邦明¹⁾・前掲〕でも確認されており、興味深い。また、長甕を作り付け甕の構造材の芯として用いる例が全国的に報告されており、県内では山三賀日遺跡・山木戸遺跡などでも同様の事例が見られるが、諏訪畑遺跡SX7には電機構造材が見られないこと、煮炊具に見られる被熱痕が外面に満遍なく見られることから、芯材として固定された状況になったことがわかる。

引用・参考文献

- ア 青木 敬 1999 「龍虎寮考—多摩市和田西遺跡からみた検討—」『土壁』第3号 41-52頁 考古学を楽しむ会
秋田市教育委員会 1990 『秋田城跡調査概報』秋田市教育委員会
- 朝岡政康 2004 「5 亀田砂丘周辺の様相」『越後阿賀北地域の古代土器様相』41-58頁 新潟古代土器研究会
- 謙山えりか 2004 『新潟市山木戸遺跡』新潟市教育委員会
- 石田明夫 1994 『会津大戸宮 遺物編』会津若松市教育委員会
- 伊藤秀和 2001 『加茂市文化財調査報告(13) 鬼倉遺跡』加茂市教育委員会
2005 『加茂市文化財調査報告(14) 馬越遺跡』加茂市教育委員会
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所
1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』81-181頁 京都大学木質科学研究所
1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』83-201頁 京都大学木質科学研究所
1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』30-166頁 京都大学木質科学研究所
1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』47-216頁 京都大学木質科学研究所
- 今井さやかほか 2007 『日本遺跡 第3次調査』新潟市教育委員会
- 上野一久ほか 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 上郷遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会
- 内田律夫 2004 「龍神と龍の祭祀」『季刊考古学』第87号 73-77頁 雄山閣
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 215-231頁 国立歴史民俗博物館
- 江口志麻 1998 「磐伏住居復元のための一考察」『研究紀要』第2号 103-125頁 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 江口友子ほか 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集 釈迦堂遺跡』新潟県教育委員会
- 大野康男 1993 「古代の村」『房総考古学ライブラリー7 歴史時代1』千葉県文化財センター
- 岡野秀典 1994 「甲斐国の龍形土器」『山梨考古学論集Ⅲ』265-286頁 山梨県考古学協会
- 小熊博治 1990 『舟ヶ森・上吉田遺跡』福島県教育委員会
- 折原洋一 2004 「第3章 新保遺跡の調査」『五泉市文化財報告(11) 新保・住吉田遺跡』9-75頁 五泉市教育委員会
- カ 龍瀬良明 1990 『自然堤防の諸類型』古今書院
- 春日真実 1993 「王朝変遷期の越後」『新潟考古』第4号 1-21頁 新潟県考古学会
1995 「古代集落の展開」『研究紀要1995』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
1997a 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 73-81頁 北陸古代土器研究会
1997b 「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 13-21頁 北陸古代土器研究会
1999 「第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
2000 「第5章 まとめ」『吉田町史 資料編1 考古・古代・中世』吉田町
2003a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第123集 神ノ羽遺跡Ⅲ (C地区)』新潟県教育委員会
2003b 「消費遺跡出土佐渡小泊産須恵器のロクロ回転方向」『研究紀要』第4号 13-26頁 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について」『新潟考古』第16号 41-76頁 新潟県考古学会
2007 「越後における古代の炊炊具について」『新潟考古』第18号 9-54頁 新潟県考古学会
- 加藤 学 2004 「新潟県域における北方系の土師器類」『越後阿賀北地域の古代土器様相』85-96頁 新潟古代土器研究会
- 狩野敏次 2007 『ものと人間の文化史117 かまど』財団法人法政大学出版局

- 鴨居幸彦 2002 「2 各地の平野地盤」『新潟県地盤図説明書』15-30頁 新潟県地質調査業協会
- 川上貞夫はら 1981 『五泉市文化財調査報告(2)山崎須志器塚址』五泉市教育委員会
1995 『舟戸遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
1996 『中組遺跡』吉田町教育委員会
- 川村浩司 2005 「越後の古代集落の素描」『新潟考古学談話会会報』第3号 27-40頁 新潟考古学談話会
- 北村 淳はら 2004 『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 日下 歳 2002 『図解 日本地形用語辞典』東洋書店
- 小池義人はら 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 細池遺跡・寺道上遺跡』新潟県教育委員会
- 小池邦明はら 1995 『新潟市丸山遺跡』新潟市教育委員会
- 小林巖雄 1995 「1 巻町周辺の地形・地質」『巻町史資料編1 考古』1-44頁 巻町
- 小林清隆 1989 「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』第24号 16-21頁 財団法人千葉県文化財センター
- 小林正吾 1998 「第3章 森の生い立ちと行方」『里山の植物(財)新潟県都市緑化センター
- サ 坂井秀弥 1989 「北陸型長巻の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥はら 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三貫目遺跡』新潟県教育委員会
1991 「佐渡の須志器」『新潟考古』第2号 26-67頁 新潟県考古学会
- 笹沢正史 1999 「第2項 窯業」『新潟県の考古学』高志書院
2003 「第5章 第1節 時代概説」『上越市史 資料編2 考古』429-441頁 上越市
- 島地 謙はら 1982 『図説木材組織』176頁 地球社
- 須沢角地A遺跡発掘調査団 1988 『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』青海町教育委員会
- 鈴木浩平 1994 「第1節 地形の概観」『新津市史 通史編 上巻』1-6頁 新津市
- 鈴木 茂 2006 「大坪遺跡の花粉分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 大坪遺跡』104-114頁 新潟県教育委員会
- 鈴木邦夫 1989 「第1編 自然」『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』1-17頁
- 鈴木俊成はら 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会
- 鈴木雄三 1987 『赤沼遺跡』郡山市教育委員会
- 鈴木隆介 1998 『建設技術者のための地形図読入門2 低地』古今書院
- 関 和彦 2000 「古代びとの建物仕様—竪穴「住居」論批判—」『住まいと住まい方—遺跡・遺物から何を读みとるか』105-118頁 岩田書院
- タ 高橋 学 2003 『平野の環境考古学』古今書院
- 滝沢規朗はら 2007 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第175集 谷内A遺跡』新潟県教育委員会
- 田中 靖 1995 『和島村文化財調査報告書第4集 門新遺跡』和島村教育委員会
- 田村順三郎 1960 『新開村郷土史』学生書房
- 立本宏明 2008 『沖ノ羽遺跡(IV)第15次調査』新潟市教育委員会
- 立本宏明はら 1998 『細池遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 立本由理子はら 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第91集 牛道遺跡』新潟県教育委員会
- 堤 隆 1990 「住居断絶時における電解体をめぐって」『東海史学』第25号 93-114頁 東海大学史学会
- 外山政子 1991 「群馬県地域の上層器瓶について」『研究紀要』第6号 95-115頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
1992 「おかカマドか—もう一つのカマド構造について—」『研究紀要』第10号 89-106頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 中川潤次 2002 「第4章 北小脇遺跡」『吉田町文化財調査報告書第9集 北小脇遺跡』15-114頁 吉田町教育委員会
- 長澤典生はら 2002 『無頭遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
2004 『五泉市文化財報告(13) 中田遺跡』五泉市教育委員会
- 新潟県中蒲原郡役所(編) 1986a 「橋田村史」『中蒲原郡誌 五泉・亀田町編(複製版)』臨川書店

- 1986b 『新聞村史』『中蒲原郡誌 新津市編(複製版)』臨川書店
- 新潟古砂丘グループ 1979 「越後平野をめぐる地形と特異-5 砂丘と平野」『アーバンクボタ』17 株式会社クボタ
- 能代川改修史編纂委員(編) 1985 『新しい流れをひらく-能代川改修史-』新津市役所
- 野水晃子^{ほか} 2003 『五泉市文化財報告(8) 新保北遺跡』五泉市教育委員会
- ハ 萩原正博 1986a 『第5章第6節 初期荘園の成立と推移』『新潟県史 通史編Ⅰ 原始・古代』517-530頁 新潟県
- 1986b 『第6章第2節 荘園と国衙領』『新潟県史 通史編Ⅰ 原始・古代』564-617頁 新潟県
- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「珪藻・花粉・植物珪酸体分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第118集 上浦遺跡』36-49頁 新潟県教育委員会
- 廣野耕造^{ほか} 1999 『大瀨遺跡』新潟市教育委員会
- 細野高伯^{ほか} 2002 『神ノ羽遺跡発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- マ 松本建速 1991 「東北部の平安時代のなべ」『紀要XⅠ』61-80頁 財団法人岩手県文化振興事業団
- 水澤幸一 2002 『中条町埋蔵文化財調査報告書第24集 船戸川遺跡4次調査』中条町教育委員会
- 水澤幸一^{ほか} 1999 『中条町埋蔵文化財調査報告書第16集 中倉遺跡3次』中条町教育委員会
- 宮本常一 2007 『日本人の住まい 生きる場のかたちとその変遷』社団法人農山漁村文化協会
- 村松町史編纂委員会(編) 1980 『村松町史 資料編第1巻』村松町
- 望月精司 1997 「第2章第4節 北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』111-138頁 真陽社
- 森田信博^{ほか} 2003 『第3章 十二田遺跡』『吉田町文化財調査報告書第11集 十二田・江添E遺跡』11-17頁 吉田町教育委員会
- 森原明廣 2000 「整穴住居の埋没過程分析の一視点-住まいの焼絶後の再認識に向けて-」『住まいと住まい方-遺跡・遺物から何を読み取るか』1-20頁 岩田書院
- ヤ 山崎 天 1999 『五泉市文化財報告(4) 小天山遺跡』五泉市教育委員会
- 山崎 天^{ほか} 2004a 『五泉市文化財報告(10) 新田遺跡』五泉市教育委員会
- 2004b 『五泉市文化財報告(12) 笥下遺跡』五泉市教育委員会
- 2004c 『五泉市文化財報告(14) 巳ノ明遺跡』五泉市教育委員会
- 2004d 『五泉市文化財報告(15) 住吉田遺跡・住吉田南遺跡』五泉市教育委員会
- 山中雄志 1998 「福島県会津地方の越後・出羽日本海系ロクロ長胴甕」『東国史論』第13号 1-12頁 群馬考古学研究会
- 2000 「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(後編)」『福島考古』第41号 51-70頁 福島県考古学会
- 2002 「会津地方におけるロクロ土師器の出現と展開を巡って」『福島考古』第43号 71-86頁 福島県考古学会
- 2003 「古代会津地方の長胴甕にみる特質について」『行政社会論集』第3号 217-236頁 福島大学行政社会学会
- 2004 「福島県会津地方の古代土師器甕について」『東国史論』第19号 1-20頁 群馬考古学研究会
- 山中雄志^{ほか} 1997 『綾金・長尾地区遺跡発掘調査報告書Ⅰ 塚田A・B遺跡、村前遺跡』喜多方市教育委員会
- 吉田達夫 2004 「第2節 地形」『五泉市史 通史編』9-14頁 五泉市
- ワ 渡邊朋和^{ほか} 1997 『金津丘陵製鉄遺跡発掘調査報告書Ⅱ』新潟市教育委員会
- 1998 『金津丘陵製鉄遺跡発掘調査報告書Ⅲ』新潟市教育委員会
- 2001 『寺道上遺跡発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- R Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (ed) 2004 *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*
- W Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (ed) 1989 *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*

別表1 遺構計測表

| 図号 | 遺構名称 | ゾーン | 時代 | 遺構種類 | 主軸 | 面積 (㎡) | | | 築込内周 | 位置 | | 遺構の有無 | 遺構の保存 |
|----|-------|---------|----|------|--------|--------|-----|-----|------|------|------|-------|-------|
| | | | | | | 上面 | | 高さ | | 平面 | 断面 | | |
| | | | | | | 北側 | 南側 | | | | | | |
| 0 | 38K1 | 4814 | 平安 | 溝 | N-4-E | 82 | 141 | 90 | 121 | 18 | 5.52 | 溝跡 | 埋没 |
| 0 | 38K2 | 4813-24 | 平安 | 溝 | N-52-W | 58 | 41 | 54 | 22 | 34 | 6.30 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38K3 | 4814 | 平安 | 溝 | N-61-E | 56 | 53 | 33 | 9 | 6.61 | 不明 | 埋没 | |
| 0 | 38K4 | 4813-24 | 平安 | 溝 | N-71-E | 304 | 73 | 50 | 38 | 6 | 5.24 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38K5 | 4813-24 | 平安 | 溝 | N-62-E | 53 | 44 | 31 | 19 | 18 | 5.53 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38K6 | 4813-25 | 平安 | 溝 | N-84-E | 47 | 35 | 43 | 29 | 4 | 6.64 | 埋没 | 埋没 |
| 0 | 38K7 | 4813 | 平安 | 溝 | N-14-W | 181 | 79 | 66 | 27 | 18 | 6.61 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38K8 | 4813 | 平安 | 溝 | N-37-W | 110 | 50 | 84 | 77 | 10 | 5.21 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I0 | 5883-9 | 平安 | 溝 | N-84-W | 256 | 87 | 133 | 20 | 16 | 6.38 | 溝跡 | 埋没 |
| 0 | 38I10 | 5883-9 | 平安 | 溝 | N-3-W | 168 | 72 | 176 | 37 | 36 | 6.14 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I11 | 5883 | 平安 | 溝 | N-60-E | 1081 | 41 | 120 | 10 | 20 | 6.53 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I12 | 5883 | 平安 | 溝 | N-11-W | 96 | 81 | 79 | 28 | 17 | 6.39 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I13 | 5883 | 平安 | 溝 | N-62-E | 74 | 89 | 56 | 38 | 4 | 6.22 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I4 | 5883 | 平安 | 溝 | N-9-E | 27 | 120 | 17 | 14 | 18 | 6.36 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I5 | 4814 | 平安 | 溝 | - | 7 | 53 | 6 | 55 | 6 | 6.01 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I6 | 4814 | 平安 | 溝 | - | 6 | 53 | 5 | 53 | 6 | 6.01 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I7 | 4813-24 | 平安 | 溝 | - | 10 | 54 | 9 | 63 | 12 | 6.90 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I8 | 4814 | 平安 | 溝 | - | 23 | 13 | 33 | 17 | 4 | 6.54 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I9 | 5883-9 | 平安 | 溝 | N-47-W | 29 | 28 | 21 | 17 | 3 | 6.52 | 不明 | 埋没 |
| 0 | 38I20 | 5883 | 平安 | 溝 | N-2-E | 80 | 64 | 48 | 22 | 23 | 6.65 | 不明 | 埋没 |

別表2 出土遺物観察表 土器

- 1 出土位置、観察札、ゾーンを記載。
- 2 図号に基づき記載。
- 3 遺物名称、重量(1/10g)
- 4 形状(形状、長さ(1/10g))
- 5 法 量 1/10g、重量、断面を必ず、断面図の数は断面の数を表すものである。
- 6 地 所 1. 全面図、断面図の中心に付する点(断面図、小断面図)を必ず記載。「長」は最大長、「高」は最大高、「厚」は最大厚(断面図を必ず記載)。
- 7 数 量 種類、断面数(1/10gを必ず記載)。
- 8 種 成 焼成温度、還元・酸化傾向の記号も必ず。
- 9 下 注 埋没品を平面的に示し、網線部分に記述していない。別表4では埋没品もしくは埋没品の埋没方向を示す。
- 10 付帯品まで断面番号を記入。

| No. | 出土位置 遺構ゾーン | 種類 | 形状 | 径長 (mm) | | 断面 | | 色調 | 焼成・磨研状況 | | 埋没方向 | 検出 時期 | 検出 全体 | 備考 | | | |
|-----|---------------|--------|-----|---------|-------|------|------|---------|---------|--------------------|-------------------|----------|----------|-------|-------|-------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | 厚さ | | 表面 | 断面 | | | | | | | |
| 1 | 38K8 | 煎茶碗 | 内外弁 | 12.8 | 7.8 | 23.1 | 21.0 | 灰 黄 | A | 還元焼 (7.5/38K8) | 0 | 0 | 右 | 14/30 | 58/30 | 20/30 | |
| 2 | 38K11 | 土師器 | 内外弁 | 12.6 | 4.5 | 4.4 | 26.5 | 24.7 | 灰、黄 | B1 | 焼成 (7.5/38K8) | 0 | 0 | 右 | 26/30 | 26/30 | 24/30 |
| 3 | 38K12 | 土師器 | 内外弁 | 12.8 | 4.8 | 4.2 | 28.2 | 24.4 | 灰、黄 | B1 | 焼成 (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 27/30 | 26/30 | 20/30 |
| 4 | 38K12 | 土師器 | 内外弁 | 13.0 | - | - | - | 灰、黄 | B1 | 焼成 (埋没) (10/38K7) | 0 | 0 | 右 | - | - | - | |
| 5 | 38K10 | 煎茶碗 | 内外弁 | - | 6.0 | - | - | 灰、黄、黒 | C1 | 焼成 (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 1/30 | 1/30 | 1/30 | |
| 6 | 38K7 | 土師器 | 長筒 | (19.7) | - | 22.4 | 18.9 | 灰、赤、黄 | B2 | 焼成 (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 5/30 | 15/30 | 24/30 | |
| 7 | 38K7 | 土師器 | 長筒 | 23.3 | - | 34.0 | 30.0 | 灰、赤 | C2 | 焼成 (7.5/38K7) | 0 | 0 | 右 | 2/30 | 2/30 | 2/30 | |
| 8 | 38K7 | 4814 | 土師器 | (21.4) | - | - | - | 灰、黒、黄 | B2 | 焼成 (10/38K7) | 0 | 0 | 右 | 14/30 | - | 12/30 | |
| 9 | 38K7 | 4813 | 土師器 | 20.5 | - | - | - | 灰、赤、黄 | C2 | 焼成 (10/38K7) | 0 | 0 | 右 | 22/30 | - | - | |
| 10 | 38K7 | 5883 | 土師器 | 22.2 | - | 33.3 | 31.0 | 灰、黄、赤 | C3 | 焼成 (10/38K7) | 0 | 0 | 右 | 28/30 | 26/30 | 30/30 | |
| 11 | 38K7 | 5883 | 土師器 | 22.8 | - | 33.0 | 33.3 | 灰、赤、黄 | C2 | 焼成 (10/38K7) | 0 | 0 | 右 | 31/30 | 33/30 | 32/30 | |
| 12 | 38I0 | 4814 | 煎茶碗 | 37.7 | - | 34.4 | 38.2 | 灰、黄、赤 | C3 | 焼成 (7.5/38K8) | 0 | 0 | 右 | 29/30 | - | 29/30 | |
| 13 | 38I4 | 5883-9 | 土師器 | 30.2 | 10.8 | 13.2 | 44.7 | 35.8 | 灰、黄、黒 | B0 | 焼成 (7.5/38K8) | 0 | 0 | 右 | 27/30 | 26/30 | 24/30 |
| 14 | 4818 | 煎茶碗 | 内外弁 | 11.9 | 7.0 | 3.6 | 21.8 | 18.8 | 灰、黒 | A | 還元焼 (7.5/38K4) | 0 | 0 | 右 | 35/30 | 36/30 | 36/30 |
| 15 | 4819 | 煎茶碗 | 内外弁 | 13.2 | 7.6 | 3.5 | 28.1 | 26.1 | 灰、黒 | A | 還元焼 (2.5/38K1) | 0 | 0 | 右 | 8/30 | 8/30 | 6/30 |
| 16 | 4810 | 煎茶碗 | 内外弁 | 13.0 | - | - | - | 灰、黄 | A | 還元焼 (36/50) | 0 | 0 | 右 | 3/30 | - | - | |
| 17 | 4A13 | 煎茶碗 | 内外弁 | 13.2 | - | - | - | 灰、黒、黄 | A | 還元焼 (2.6/38Y1) | 0 | 0 | 右 | 1/30 | - | - | |
| 18 | 4C4 | 煎茶碗 | 内外弁 | 13.0 | - | - | - | 灰、黄 | A | 還元焼 (10/38Y1) | 0 | 0 | 右 | 5/30 | - | - | |
| 19 | 4C3 | 煎茶碗 | 内外弁 | 13.0 | - | - | - | 灰、黄、黒 | A | 還元焼 (10/38Y1) | 0 | 0 | 右 | 8/30 | - | - | |
| 20 | 4C4 | 土師器 | 内外弁 | 12.5 | 4.9 | 3.7 | 29.0 | 28.2 | 灰、黒 | B1 | 焼成 (7.5/38K6) | 0 | 0 | 右 | 26/30 | 26/30 | 26/30 |
| 21 | 4C4 | 土師器 | 内外弁 | 13.7 | - | - | - | 灰、黄 | B1 | 焼成 (10/38K7) | 0 | 0 | 右 | 4/30 | - | - | |
| 22 | 4C14 | 土師器 | 内外弁 | 13.0 | - | - | - | 灰、黒、黄、赤 | C1 | 焼成 (埋没) (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 7/30 | - | - | |
| 23 | 4814 | 土師器 | 内外弁 | - | 15.5 | - | - | 灰、黄、黒 | B1 | 焼成 (10/38K7) | 0 | 0 | 右 | 1/30 | 1/30 | 1/30 | |
| 24 | 4820 | 土師器 | 内外弁 | - | (6.2) | - | - | 灰、黄 | B1 | 焼成 (2.5/38K2) | 0 | 0 | 右 | 9/30 | - | - | |
| 25 | 4810 | 土師器 | 内外弁 | - | (3.7) | - | - | 灰、黄 | B1 | 焼成 (2.5/38K2) | 0 | 0 | 右 | 9/30 | - | - | |
| 26 | 4820 | 土師器 | 内外弁 | - | 4.8 | - | - | 灰、赤、黒 | C1 | 焼成 (2.5/38K6) | 0 | 0 | 右 | 24/30 | - | - | |
| 27 | 4810 | 土師器 | 内外弁 | - | 5.5 | - | - | 灰、黄 | B1 | 焼成 (7.5/38K7) | 0 | 0 | 右 | 1/30 | - | - | |
| 28 | 201E | 煎茶碗 | 内外弁 | 13.8 | 4.8 | 4.8 | 34.4 | 34.4 | 灰、赤、黄 | C1 | 焼成 (埋没) (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 18/30 | 20/30 | 21/30 |
| 29 | 4815 | 煎茶碗 | 内外弁 | (14.0) | - | - | - | 灰、黒、黄 | C1 | 焼成 (2.5/38K3) | 0 | 0 | 右 | 1/30 | - | - | |
| 30 | 4C3 | 煎茶碗 | 内外弁 | - | (5.1) | - | - | 灰、黄、黒 | B1 | 焼成 (7.5/38K6) | 0 | 0 | 右 | 1/30 | - | - | |
| 31 | 4810 | 煎茶碗 | 内外弁 | - | (4.8) | - | - | 灰、黒、黄 | C1 | 焼成 (7.5/38K6) | 0 | 0 | 右 | 16/30 | - | - | |
| 32 | 4C11 | 土師器 | 内外弁 | - | (5.0) | - | - | 灰、黄 | B1 | 焼成 (還元) (7.5/38K6) | 0 | 0 | 右 | 6/30 | - | - | |
| 33 | 4820-25 | 土師器 | 長筒 | 21.8 | - | 35.3 | 30.2 | 灰、黒、黄、赤 | B1 | 焼成 (埋没) (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 22/30 | - | 22/30 | |
| 34 | 5884 | 土師器 | 長筒 | (20.0) | - | - | - | 灰、黒、黄、赤 | C2 | 焼成 (埋没) (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 13/30 | - | - | |
| 35 | 4C19 | 土師器 | 長筒 | (24.0) | - | - | - | 灰、黒、黄 | C2 | 焼成 (埋没) (2.5/38K3) | 0 | 0 | 右 | 4/30 | - | - | |
| 36 | 4815 | 土師器 | 小瓶 | (13.0) | - | - | - | 灰、黒、黄 | C2 | 焼成 (埋没) (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 1/30 | - | - | |
| 37 | 4C15 | 土師器 | 小瓶 | (15.2) | - | - | - | 灰、黄、黒 | C2 | 焼成 (埋没) (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 3/30 | - | - | |
| 38 | 4C11 | 土師器 | 小瓶 | (15.0) | - | - | - | 灰、黒、黄、黒 | B2 | 焼成 (埋没) (13/38K7) | 0 | 0 | 右 | 8/30 | - | - | |
| 39 | 4C11 | 土師器 | 小瓶 | (13.0) | - | - | - | 灰、黒、黄、黒 | B2 | 焼成 (埋没) (13/38K7) | 0 | 0 | 右 | 6/30 | - | - | |
| 40 | 4C19 | 土師器 | 小瓶 | - | 5.0 | - | - | 灰、黒、黄 | C2 | 焼成 (埋没) (10/38K6) | 0 | 0 | 右 | 26/30 | - | - | |
| 41 | 4824 | 土師器 | 小瓶 | - | (6.0) | - | - | 灰、黒、黄 | C2 | 焼成 (埋没) (2.5/38K4) | 0 | 0 | 右 | 11/30 | - | - | |
| 42 | 4C11 | 土師器 | 小瓶 | 7.5 | - | - | - | 灰、黒、黄、黒 | B2 | 焼成 (埋没) (7.5/38K7) | 0 | 0 | 右 | 36/30 | - | - | |
| 43 | 4C11 | 土師器 | 小瓶 | (7.7) | - | - | - | 灰、黒、黄、黒 | B2 | 焼成 (埋没) (7.5/38K7) | 0 | 0 | 右 | 11/30 | - | - | |

別表3 遺物観察表 土鐘

| 観測 No. | 出土位置 グロブ | 種類 | 径長 (cm) | | | | 重量 (g) | 備付状況 (cm) |
|-----------|-------------|----|------------|------------|------------|------------|-----------|--------------|
| | | | 長径 (cm) | 短径 (cm) | 厚さ (cm) | 高さ (cm) | | |
| 44 | 1 | 土鐘 | 4.0 | 3.0 | 0.5 | 3.0 | 45.0 | 9.0 |

別表4 遺物観察表 鉄斧

| 観測 No. | 出土位置 グロブ | 種類 | 径長 (cm) | | | | 重量 (g) | 色調 |
|-----------|-------------|----|------------|------------|------------|------------|-----------|----|
| | | | 長径 (cm) | 短径 (cm) | 厚さ (cm) | 高さ (cm) | | |
| 45 | 1 | 鉄斧 | 4.0 | 3.0 | 0.4 | 1.7 | 15.0 | 黒色 |
| 46 | 1 | 鉄斧 | 4.0 | 3.0 | 0.5 | 1.8 | 15.0 | 黒色 |
| 47 | 1 | 鉄斧 | 4.0 | 3.0 | 0.6 | 2.2 | 15.0 | 黒色 |

別表5 遺物観察表 搬入礎

| 観測 No. | 出土位置 グロブ | 種類 | 径長 (cm) | | | | 重量 (g) | 色調 |
|-----------|-------------|-----|------------|------------|------------|------------|-----------|----|
| | | | 長径 (cm) | 短径 (cm) | 厚さ (cm) | 高さ (cm) | | |
| 48 | 1 | 搬入礎 | 13.0 | 11.0 | 2.0 | 2.0 | 150.0 | 黒色 |
| 49 | 1 | 搬入礎 | 13.0 | 11.0 | 2.0 | 2.0 | 150.0 | 黒色 |
| 50 | 1 | 搬入礎 | 13.0 | 11.0 | 2.0 | 2.0 | 150.0 | 黒色 |

別表6 主要遺構出土土器 器種構成表

- 1 主要遺構から出土した土器の器種ごとの構成比を示した。
- 2 計算方法は総重量相対法（字附102）を、それも適用した重量相対法により計算した。また、あわせて総重量および構成比を示した。
- 3 計算によって得られた数値は「0」をなし、それぞれに百分・小数点と表記した。

| 遺構 | 土器種 | 器種ごとの構成比 | | | | 器種ごとの重量相対法 | | | | 合計 | | | |
|------|-----|----------|-----|-------|--------|------------|--------|------|--------|-------|--------|-------|--------|
| | | 器種別 | | 器種別 | | 器種別 | | 器種別 | | | | | |
| | | 重量 | 構成比 | 重量 | 構成比 | 重量 | 構成比 | 重量 | 構成比 | | | | |
| SK7 | 土鐘 | | | | | 4.1 | 100.0% | | | 4.1 | 100.0% | | |
| | 土鐘 | | | | | 28 | 100.0% | | | 28 | 100.0% | | |
| | 鉄斧 | | | | | 3.6 | 100.0% | | | 3.6 | 100.0% | | |
| | 鉄斧 | | | | | 12 | 100.0% | | | 12 | 100.0% | | |
| | 鉄斧 | | | | | 107 | 100.0% | | | 107 | 100.0% | | |
| SK8 | 土鐘 | | | 0.30 | 100.0% | 53.16 | 100.0% | | | 33.16 | 100.0% | | |
| | 土鐘 | | | | | | | | | 0.30 | 100.0% | | |
| | 鉄斧 | | | | | | | | | 1 | 100.0% | | |
| | 鉄斧 | | | 0.038 | 10.1% | 0.25 | 89.9% | | | 0.278 | 100.0% | | |
| | 鉄斧 | | | 1 | 31.0% | 2 | 67.0% | | | 3 | 100.0% | | |
| SK9 | 土鐘 | | | 1 | 4.3% | 3 | 11.1% | 14 | 60.9% | 4 | 17.4% | 23 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 5 | 0.8% | 12 | 1.8% | 483 | 72.7% | 96 | 14.5% | 664 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | 0.33 | 84.8% | 0.56 | 14.8% | | | 0.89 | 100.0% | | |
| | 土鐘 | | | 3 | 61.3% | 1 | 20.7% | | | 4 | 100.0% | | |
| | 鉄斧 | | | | | 1 | 3.7% | | | 1 | 100.0% | | |
| SK10 | 土鐘 | | | 13 | 30.0% | 1 | 2.5% | 26 | 65.0% | 1 | 2.5% | 40 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 20.5 | 4.7% | 3 | 0.5% | 524 | 93.0% | 3 | 1.2% | 547.5 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | | | | | | | 0.81 | 100.0% | 0.81 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | | | 0.75 | 56.4% | | | 0 | 100.0% | 0 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 1 | 8.3% | | | | | 0.58 | 45.6% | 1.33 | 100.0% |
| SK11 | 土鐘 | | | 1 | 2.0% | 1 | 2.0% | 10 | 20.0% | 11 | 55.0% | 12 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 19 | 0.9% | | | 464 | 22.1% | 0.22 | 1.1% | 483 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | 1.12 | 75.8% | | | 0.22 | 12.3% | 0.12 | 10.8% | 1.46 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | 12 | 65.8% | | | 1 | 7.1% | 1 | 7.1% | 14 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 1.08 | 100.0% | | | | | | | 1.08 | 100.0% |
| SK12 | 土鐘 | | | 2 | 100.0% | | | | | | | 2 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 22 | 43.3% | 28 | 53.0% | 3 | 3.4% | | | 53 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 90 | 42.9% | 111 | 52.9% | 6.7 | 4.2% | | | 207.7 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | 1.06 | 100.0% | | | | | | | 1.06 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | 8 | 100.0% | | | | | | | 8 | 100.0% |
| SK13 | 土鐘 | | | 2 | 92.4% | | | 0.14 | 6.6% | | | 2.14 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 2 | 100.0% | | | | | | | 4 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 17 | 73.9% | 4 | 17.4% | 3 | 6.7% | | | 24 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 204 | 77.0% | 27 | 14.1% | 23 | 8.4% | | | 254 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | | | | | 0.28 | 100.0% | | | 0.28 | 100.0% |
| SK14 | 土鐘 | | | 0.11 | 100.0% | | | | | | | 0.11 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 1 | 100.0% | | | | | | | 1 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 1 | 12.5% | | | 3 | 87.5% | | | 4 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 40 | 56.2% | | | 31 | 43.7% | | | 71 | 100.0% |
| | 土鐘 | | | | | 0.11 | 100.0% | | | | | 0.11 | 100.0% |
| SK15 | 土鐘 | | | 2 | 100.0% | | | | | | | 2 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | | | 0.14 | 100.0% | | | | | 0.14 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | | | 2 | 100.0% | | | | | 2 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 1 | 0.1% | | | 10 | 90.9% | | | 11 | 100.0% |
| | 鉄斧 | | | 1.5 | 0.7% | | | 534 | 99.7% | | | 535.5 | 100.0% |

空中写真 (1943年)

写真図版 1



◎ 岡崎炮台跡

3210145402 1703



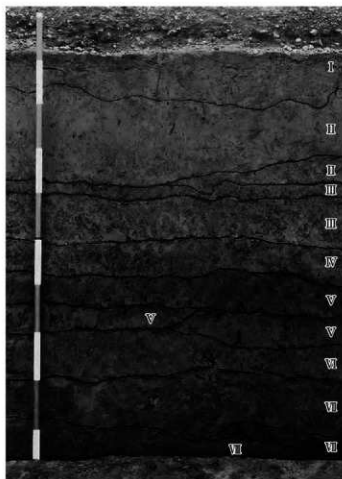
空中写真1（東から新津丘陵を望む）



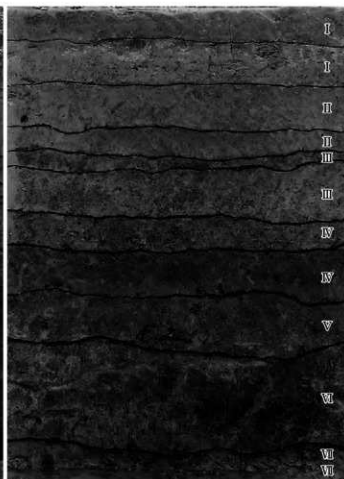
空中写真2（西から五頭山方向を望む）



調査着手前（南から）



基本層序1 (5C15)



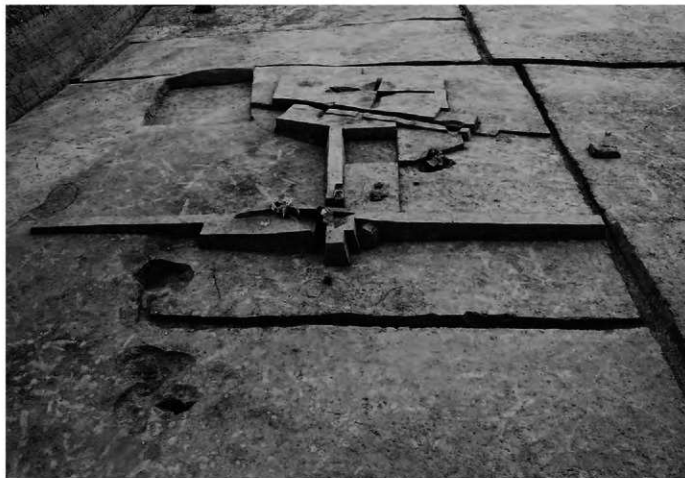
基本層序2 (5B15)



完掘状況1Cグリッド周辺（北東から）



完掘状況5Bグリッド周辺（南西から）



遺構配置状況 (南から)



完掘状況 (南から)



SK2完掘 (北西から)



SX4断面 (西から)



SX4断面 (南から)



SK5断面 (北から)



SK3・SX4・SK5完掘 (北から)



SX7検出状況 (北西から)



SX7断面 (北から)



SK8完掘（東から）



SD9断面【j-j'】（東から）



SD9完掘（東から）



SK10罎12出土状況（南から）



SK10断面（東から）



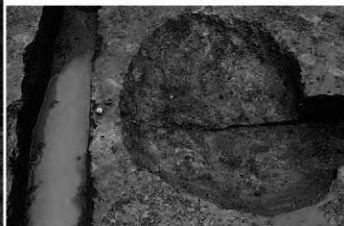
SK10完掘（南から）



SK11完掘（東から）



SK12完掘（東から）



SK13完掘（東から）



P14断面（東から）



SK20完掘（東から）



P14平底鍋13出土状況（東から）



4B20・25グリッド長甕33出土状況（南から）



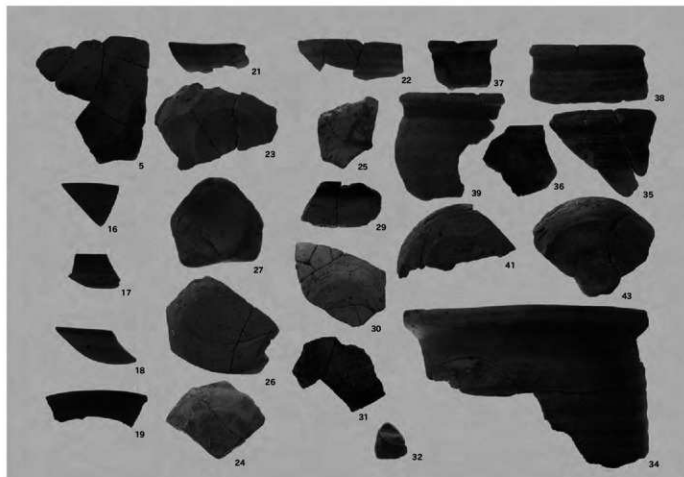
集合写真1 (土器)



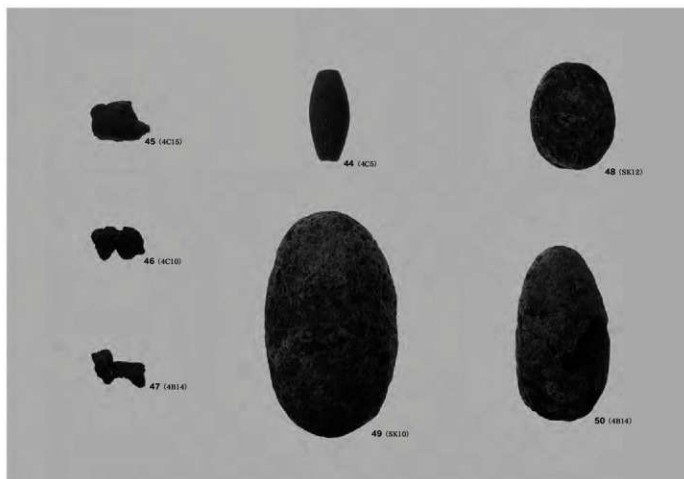
集合写真2 (土鍾・鉄滓・搬入磔)



遺構 (1~4・6~13)、包含層 (14・15・20・28・33・40・42)



SK10 (5)、包含層 (16~19・21~27・29~32・34~39・41・43)



土製品・鉄滓・搬入礫



須恵器無台杯 (14) 外面底部ヘラ切



土師器無台碗 (2) 外面底部糸切



黒色土器無台碗 (28) 外面底部ノクロケズリ



土師器小型甕 (42) 外面底部糸切



土師器長甕 (10) 外面体部上カキ目



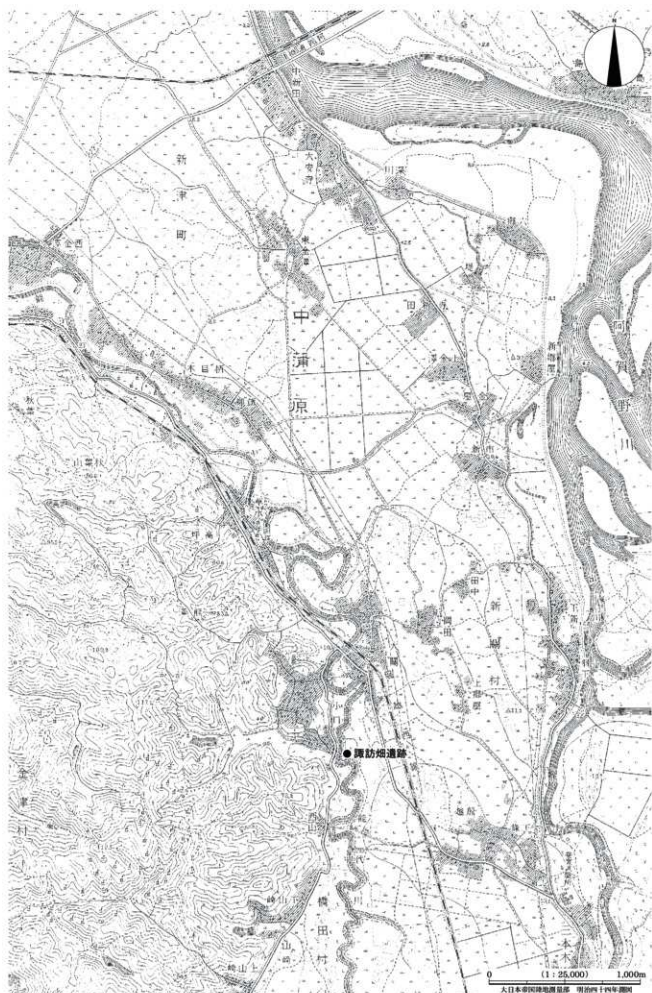
土師器長甕 (11) 外面体部下半タタキ



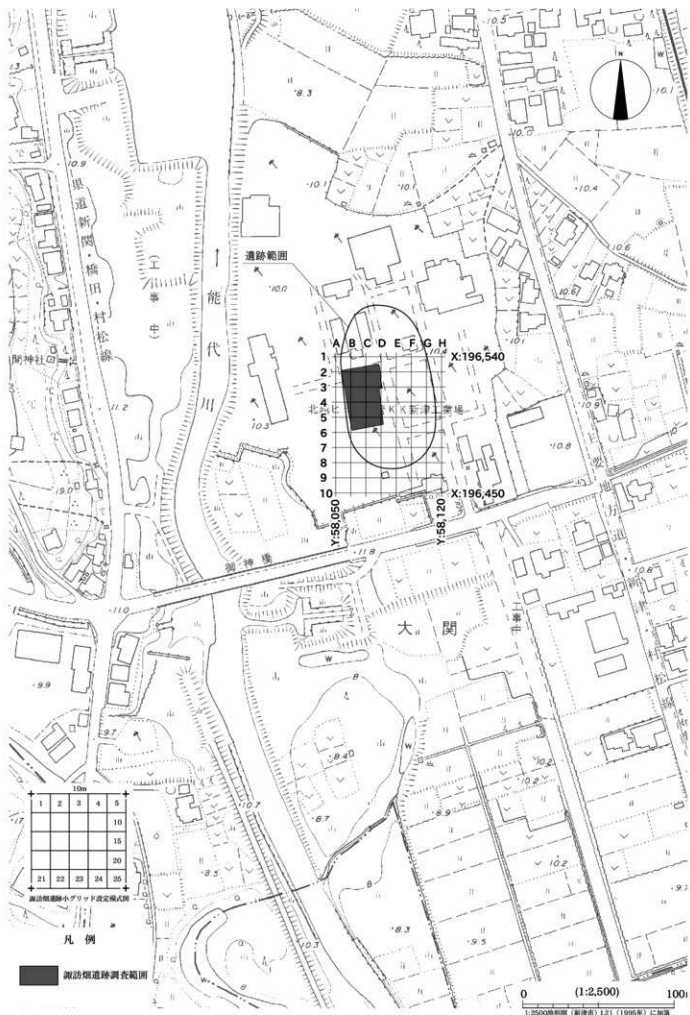
土師器 鍋 (12) 外面底部タタキ



土師器 鍋 (13) 外面底部ケズリ





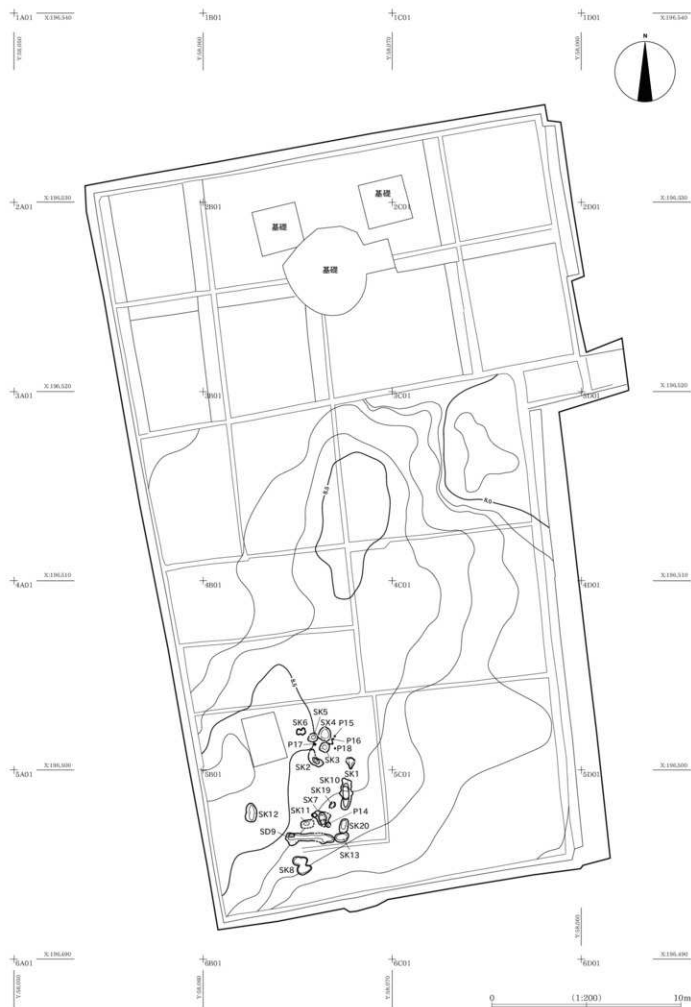


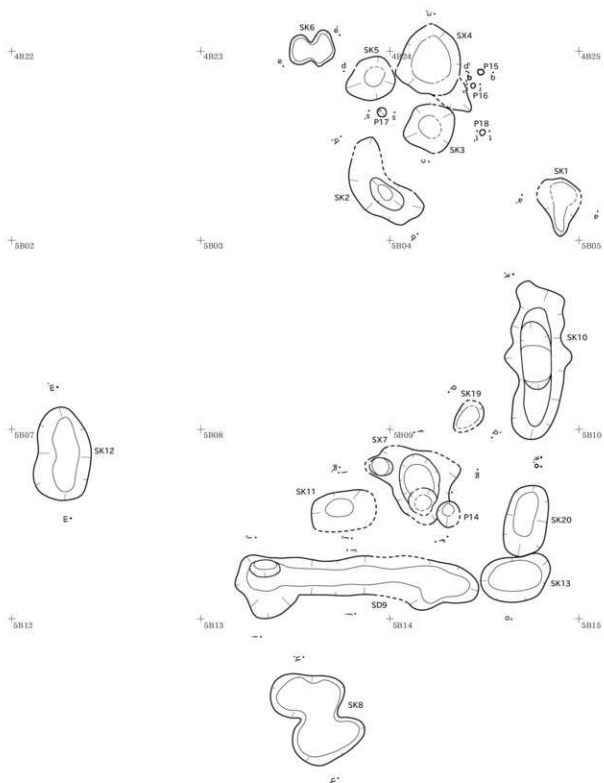
凡例

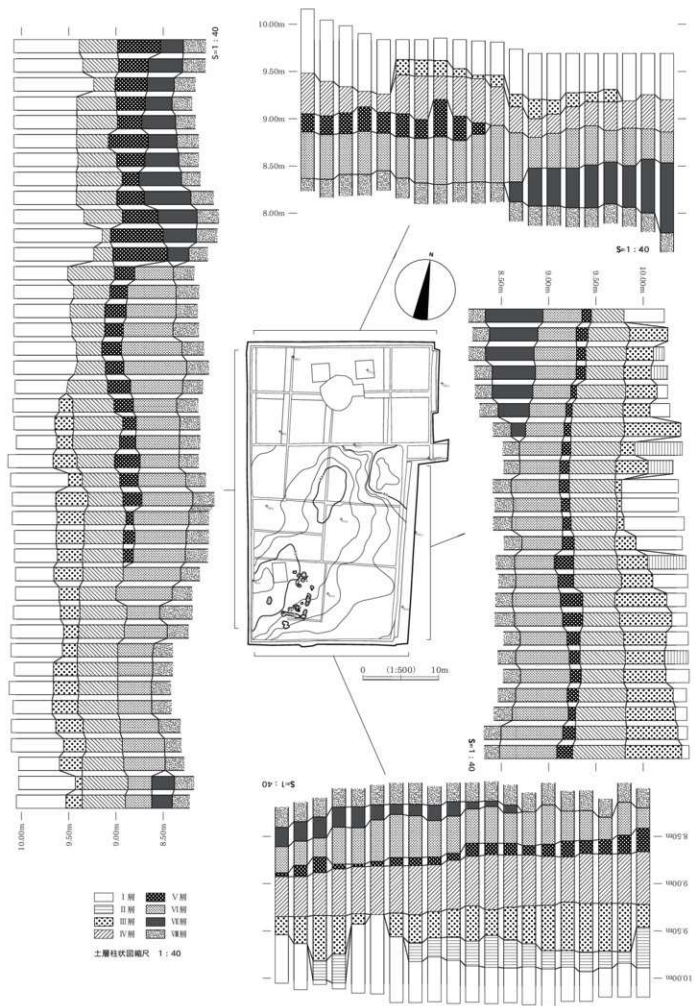
調査無道跡調査範囲

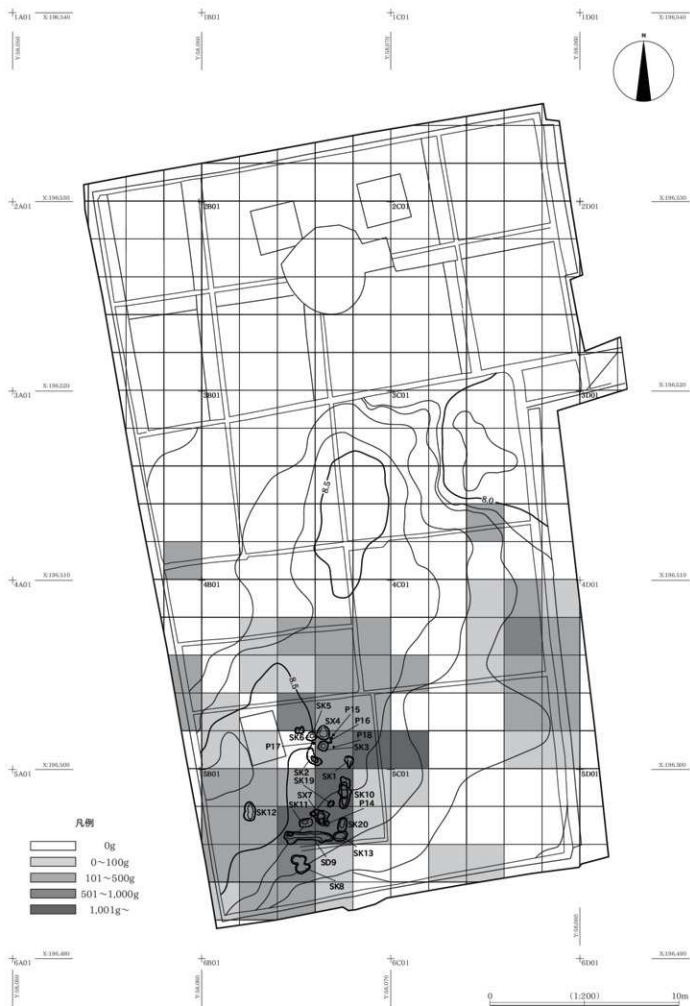
0 (1:2,500) 100

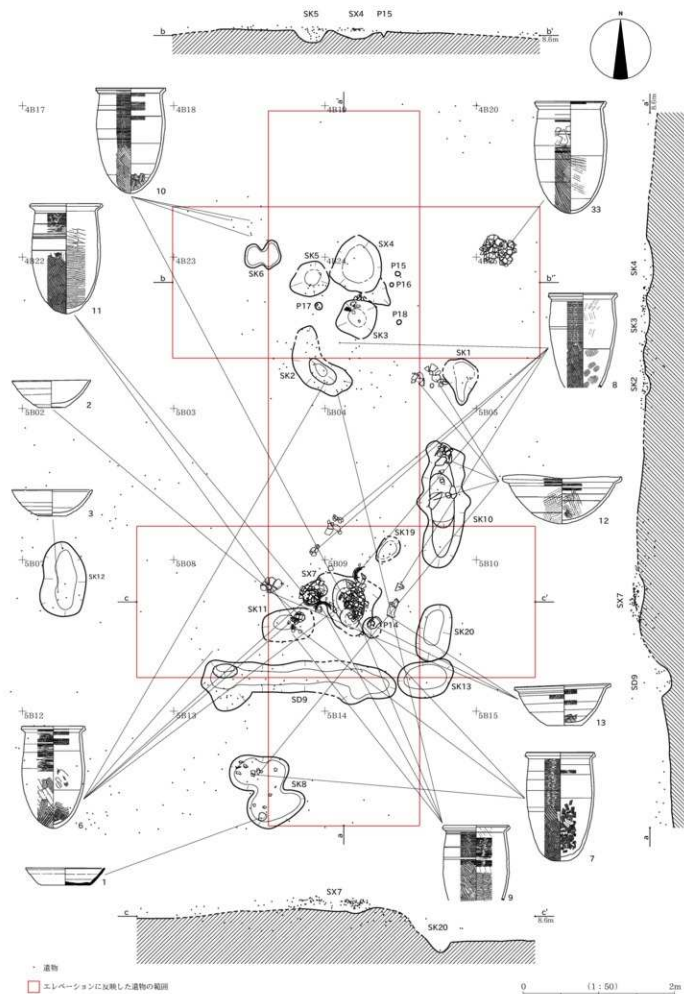
1:2500地形図 (新津市) L21 (1996年) に基づく



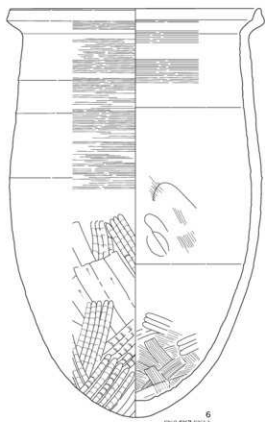
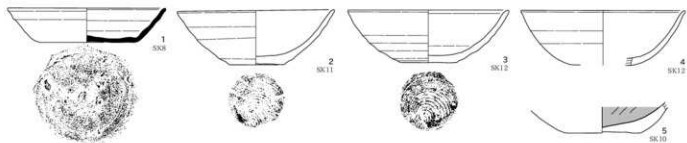




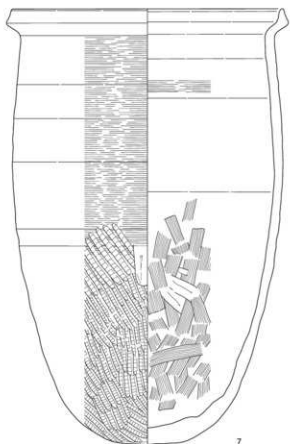




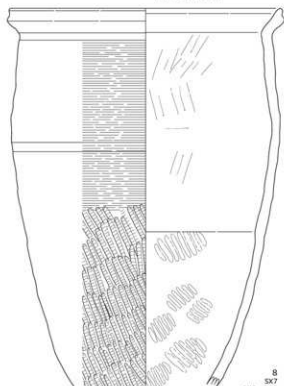




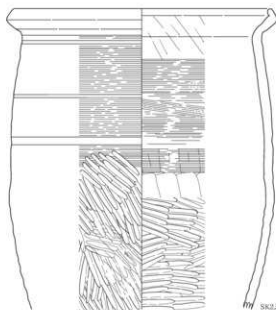
6
SK2,SK7,SK11
4823・24,508・98



7
SK7,SK8,SK11
4816,589・13

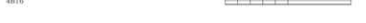
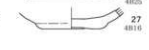
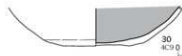
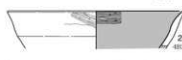
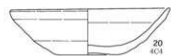
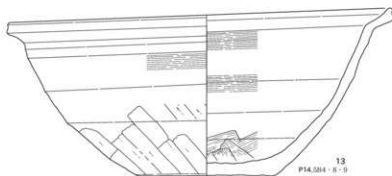
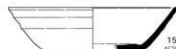
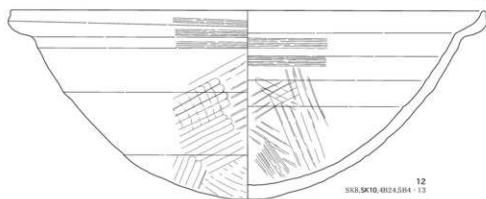
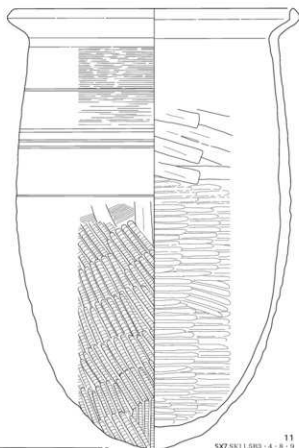
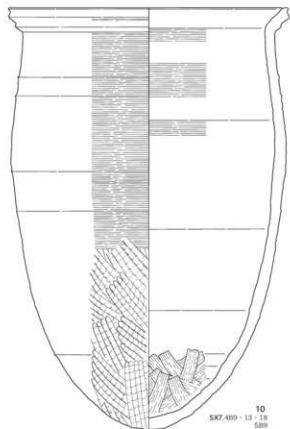


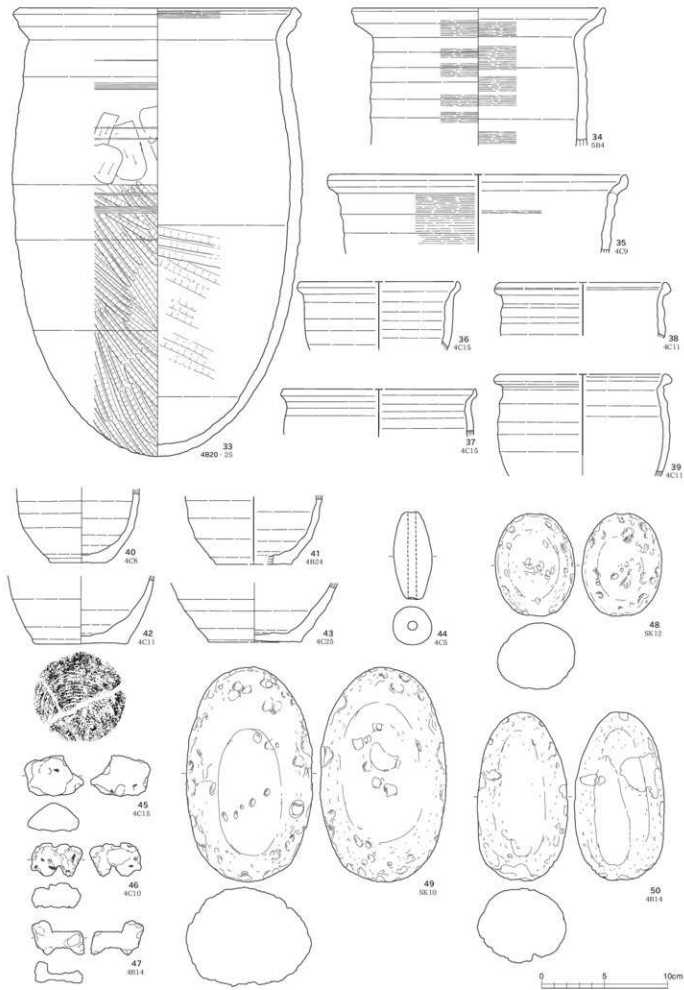
8
SK7
083・4・9



9
SK2,SK7,4823
508・9

0 5 10cm





報告書抄録

| ふりがな | すわはたいせきだいさんじちようき | | | | | | | |
|--------|---|--------------------|------|----------------------------|------------|---------------------------|-------------------|-------------|
| 書名 | 諏訪畑遺跡 第3次調査 | | | | | | | |
| 副書名 | 介護老人保健施設「秋葉の郷」建設に伴う発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 潮田憲幸 | | | | | | | |
| 編集機関 | 新潟市埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒950-3101 新潟市北区太郎代2554 TEL 025 (255) 2006 | | | | | | | |
| 発行年月 | 西暦2008年3月28日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 諏訪畑遺跡 | 新潟県新潟市秋葉区大関字諏訪畑242番地1ほか | 152013 | 722 | 37°46'05" | 139°09'32" | 20070214 ～ 20070322 | 896m ² | 老人健康保健施設の建設 |
| 所収遺跡 | 遺跡の種類 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 諏訪畑遺跡 | 遺物包含地 | 平安時代(9世紀後半～10世紀初頭) | | 溝状遺構・土坑・ピット・性格不明遺構 計20基 | | 須恵器・土師器・黒色土器・土鏃・鉄滓・搬入礫 | | |
| 要約 | <p>新津丘陵の東、五泉市との境界付近の沖積地に位置する。能代川右岸の自然堤防上に立地し、現地標高は約10mである。発掘調査の結果、平安時代(9世紀後半～10世紀初頭)の遺構・遺物が発見された。遺構は調査区の南西部に集中し、溝状遺構・土坑・ピット・伊勢と思われる性格不明遺構が検出されている。遺構は2つの伊勢状遺構を囲むように2つのグループをなす。土器は須恵器・土師器・黒色土器が出土している。煮炊具の割合が高く、遺構の性格とあわせて判断すると、煮炊きを行った炊事場的な機能が窺われる。9世紀末から10世紀初頭にかけての長巻が一括で出土しており、佐渡産須恵器・土師器無台碗との共存関係を確認できるため、当該時期の土器編年を考える上でも、良好な資料である。</p> | | | | | | | |

諏訪畑遺跡 第3次調査

介護老人保健施設「秋葉の郷」建設に伴う発掘調査報告書

2008年 3月 27日印刷
2008年 3月 28日発行

編集・発行 新潟市教育委員会

〒950-8550 新潟県新潟市中央区白山浦1-425-9
TEL 025 (228) 1000
新潟市埋蔵文化財センター
〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代2554
TEL 025 (255) 2006

印刷・製本 株式会社セピアス

本 社 〒169-0072 東京都新宿区大久保1-10-8
TEL 03 (5285) 3430
いわき支社 〒970-8026 福島県いわき市平字作町1-3-11
TEL 0246 (22) 6209